

325

272

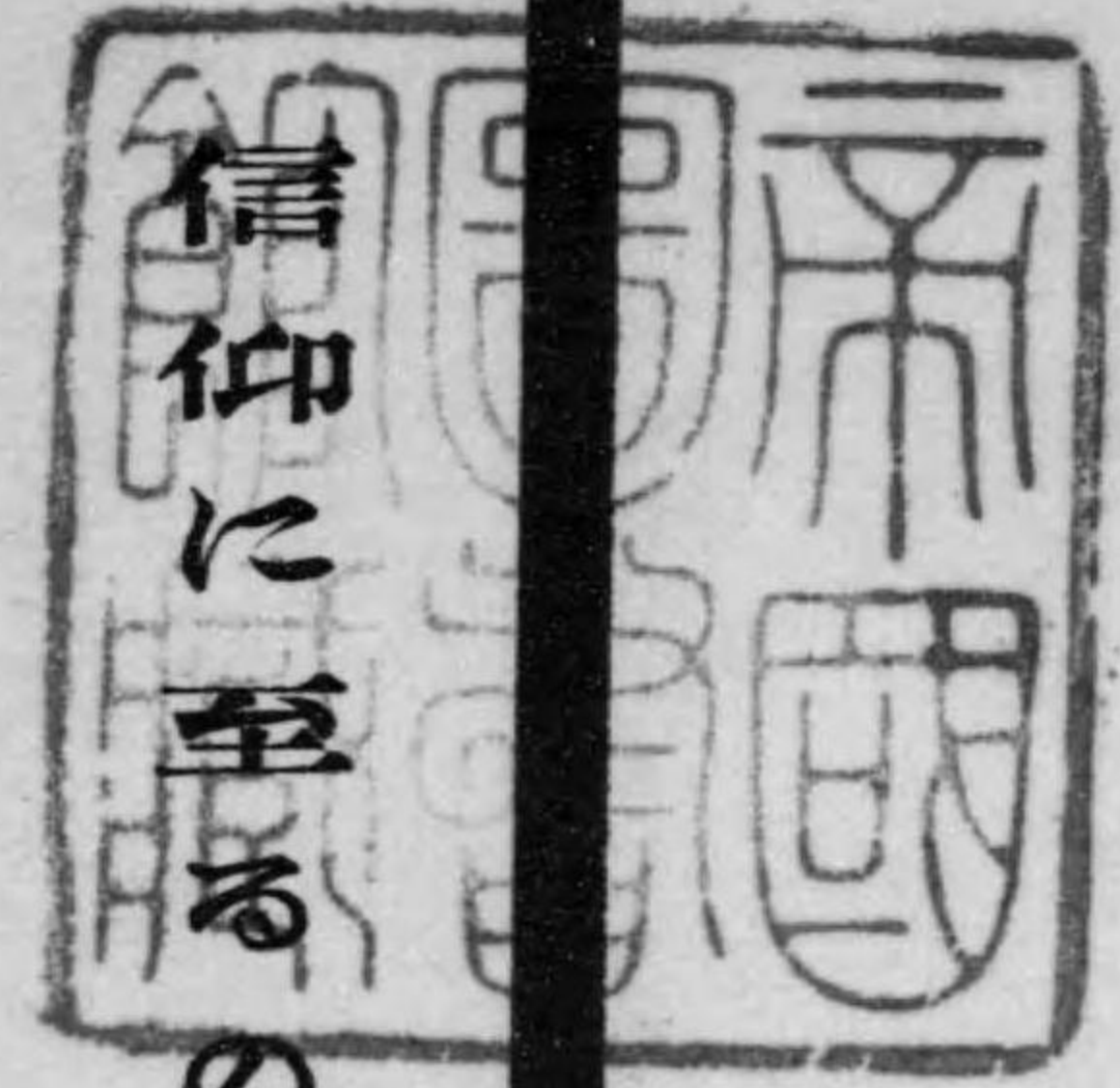
5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



1136

325-272



信仰に至る
の道

大正
権田
雷斧
著





著者小照



雷 淋 症

李廷玉



信者宇宙生命。點在法法塵塵生
命。故人亦以信爲生命。無信者猶
如死尸不可得爲人道活動。現今我
同胞死者不尠。豈無淚乎。此書老
迂澹然之痕。讀者知之云爾。

于時大正六年十二月

權田雷斧序

序

信は宇宙の生命なり。點在せる法々塵々の生命なり。人亦信を以て生命と爲す。信なき者は猶死尸の如く、人道の活動は爲し得べからざるなり。現今同胞の士死者尠からずと爲す。豈涙な

からんや。此書は老迂が潜然の痕なり。讀者之
れを知り給へと云ふこと爾り。

于時大正六年十二月

權田雷斧

目次

物質的文明と精神的文明	二
文明開化の開化は怪化也……歸朝せる人の失策……動物の虐待……佛教家の當然の責務…… 誠は不妄語也……大和魂は誠也	
人の口	一七
天と地と人と……偽り無き言は即ち聖人の言也……象の安産……口罪の區別……妄語…… 悪口……兩舌……綺語	
父母の恩	三六
袈裟に換へたる米……釋尊父君の棺を昇く……母の肖像畫	
國王の恩	四四
酬ゆる能はざる高恩……暗涙滂沱	

相互の恩……………四九

孔雀來り鶴來る…徳を以て仇讐に報ゆ…平和とは融和也…道の實體は正直也

三寶……………五九

三寶の廣義…同體の三寶…別體の三寶…住持の三寶…住持三寶の實證…國體を知らぬ愚論…西洋かぶれ…支那かぶれ…同化する力…數種の實例…佛教は道徳の根據…忠孝は理窟にあらず

忍の養成……………七

生忍と法忍と…宮樓那尊者の忍…空也上人の忍…忍は法性也…西行法師の忍

疑はしき仁術……………八五

一は進歩、一は退歩…精神界の一大敵國…醫者と和尙…千金方の至言

富者の萬燈、貧者の一燈……………九四

守錢奴に人情なし…四海同胞…吝嗇は無意義なり

忠なれば孝……………一〇〇

佛教の渡來…銘打たざるも國教なり…忠孝即日本魂…1 父母の恩…2 國王の恩…3 衆生の恩…4 三寶の恩…一大孝經…忠孝は一體なり…太陽の恩と父母の恩…1 懐胎守護の恩…2 胎産受苦の恩…3 生子忘憂の恩…4 回乾就溫の恩…5 嚙苦吐甘の恩…6 乳哺養育の恩…7 洗濯不淨の恩…8 爲子造惡業の恩…9 違行憶念の恩…10 究竟憐愍の恩

道と信……………一〇五

信の姿…練膽も技巧に止まるべし…國務大臣及び衆議員…田夫村娘にも信無かるべからず…重大なる宗教家の責任

金甌無缺の國……………一〇三

萬世不易の國…不忠の儒…君臣倫と父子倫…天照太神の大麻

佛教と耶蘇教……………一四〇

國家の法律と眞正なる宗教…耶蘇教徒の盲言…私の耶蘇教觀

横暴の手……………一五〇

強制的選俗……薩長土の暴戾……壁畫と十三重の塔……行基菩薩の阿彌陀佛……滑稽
牽強附會……寺領の没收……墮落の淵に導く……説教の關涉……佛教不可亡の一大原因……
……浅草觀音の靈體

明治天皇と佛教……………一七一

明治天皇の信仰……薩長土に御遠慮……中山寺觀音の「鉦の緒」……孝明天皇の御信仰上の
事蹟

明治天皇信仰上の御事蹟……………一七九

高野山に御助願の御繪旨……聖德太子の像に御衣を賜ふ……般若心經の勅封……高野山に
御祈禱御許可……二大譯の大藏經

—目次終—



信仰に至るの道

豊山大學校長 權田雷斧 著

物質的文明と精神的文明

文明開化の開化は怪化也

歐米の文明、之を言ひ換ふれば物質的文明が、今日の如く進んで来たのは、善い現象であるか、悪い現象であるか。吾々宗教家からでは、一概に、之を善い現象といふことも出来なければ、又悪い現象といふことも出来ぬ。けれども、たゞ何事でも、物質の一點張りて律して行かうといふやうになるやうな時代が来るとすれば、物質的文明なるもの、精神界に及ぼす害悪といふものは、擧げて數ふべからざるに至るであらう。さすれば、まことに由々しき大問題だと云はねばならぬ。

一體此の物質的文明、即ち西洋の文明なるものは、どういふ理由からして、かくの如く、恰も水の流れて濁きざるが如く、茫然として進歩して来たか。

西洋では、その以前、基督教が非常に隆盛を極め、すべての教育、政治などを支配して居つて、最も精神の修養を鼓吹して居つた。ところが、或る一部のものが、これに反抗の態度を取り出した。基督教の精神上の靈妙なる働を説いたり、天國を説いたりするのを蔑視して、なんでも物質上から研究して、其の基督教の説くところの天國などの事を、人を愚妄にする虚構であるといふやうに思はせるやうにしたいと、何事でも格物致知でやつて退けようといふ研究の歩武を進めた。さうして、基督教に反對の旗を樹つるに至つた。

されば、物質的文明が進歩すれば、精神的文明は、それだけ退歩して行くといふ事になる。けれども、吾々は此の世に處して、何を爲すか。何を爲さざるべからざるか。ただ文明々と物質的ばかりに傾いては、遂に身を安んずる處もなく、甚だ無味枯淡なるものになつて、人生の一大要件たる、安樂に日を暮らすといふ事は、死すとも之を得ることが出来なくなる、互に鎗を削り、揖讓といふことも辨へず、道德は地に墮ちて

まことに凄じいものになつて了ふことになる。人生といふものは、決してそんなものではない。

かう語つて來ると、所謂西洋の文明なるものは、人の體として見れば、隻手とか隻脚とかいふやうな不具者であると云つても決して差支はないことになる。満足の人とあれば、兩手が無ければならぬし、兩脚がなければならぬ。精神的文明の缺けたる文明は、即ち之を片輪文明だといふことが出来るぢやないか。

此度の歐洲の大戦争に見ても、この片輪文明の、如何に遺憾なく進歩して來たかを推知することが出来る。友誼同情といふやうな、うるはしい點が、すこしたりとも何處に存在してゐるか、昨日の友は今日の敵、言葉に出して云ふも、實に苦々しき沙汰の限りである。で、私は何日も左様思つて居ることであるが、今日の歐米の文明なるものが、眞の文明といふものならば、又眞の文明と云はなければならぬものならば、文明なるものは、極めて悲惨な主義なるものに外ならないものだと思ふのである。

吾々は、以前よりいはゆる文明といふものを、深く疑つて來た。文明を言ひ換ふれば開化であるが、其の開化の開は、開にあらずして、怪ではあるまいか、即ち文明を言ひ換ふれば、怪化となつて、あやしくばけるといふことになりはすまいか。否、遂に怪しく化けて了つて、道德といふものは、月に日に菲薄に流れて行く、まことに浩嘆に堪へない次第である。

歸朝せる人の失策

我日本に於いて、徳川時代に行はれた萬事は、文明維新になつてからは、非文明非文明といはれて、一から十まで排斥されて了つた。教育も、政治も、皆舊慣を捨て、了つて、新しい方にのみ走つた。即ち西洋に標準を取つた。西洋に標準を取らなければならぬやうに考へた。これは又、何といふ淺ましい見の持方であつたか。兎も角も、恚ういふ不心得をやつたのは、當時西洋から歸朝した人達の終生の失策と云はなければなら

ぬ、其の人達は、西洋の國體を研究して來たのではなく、たゞその物質的文明の皮相だけを見て來て、これは便利だ〜と驚いて、わけもなく、舊習慣を排斥したのである。彼の長所を知り、此の短所を補ふといふやうな政策を取つたのであつたならば、維新當時のあんな足下から鳥の起つやうな變化は無かつたことだらうと思はるゝのである。恚ういふやうな次第であつたから、精神修養は、見る見るうちに衰頹して行つた。實際此の時分のやり口は、精神修養を説いて居るやうな迂遠極まる政策は、文明に背馳することが甚だしいといつたやうな、言語同斷の風を裝ふのみで、識者は竊かに長大息を洩らしてゐた。

であるから、精神的文明を鼓吹すべき我が佛教が虐遇されたことは、殆んど言語に絶する位であつた。尤も之には他に原因もある。といふのは、王政復古を成功せしめたのは薩長土の三藩であるが、薩長土は、いづれも揃ひに揃つた佛教嫌ひであつた、さうして徳川は佛教の信仰者であり、宮中も佛教の御信仰者であらせらるゝ、そこで宮中では

薩長土に御遠慮なされて、御信仰で居らせらるゝことを目に立たぬやうになさるゝ、それ故に薩長土は極力佛教に壓迫を加へたのである。

そも〜佛教は、我日本にては國教の様になつて、上は御一人より、下は賤が伏屋に至るまで、一人として信仰せぬものはない。それを、何故に薩長土のみが、信仰せざるのみか、壓迫までも加へて、之を滅ぼさうとまでにもしたのか。之には多少の原因もあるのだ。

薩長土では、維新前、古くより僧侶を高く用ゐて、相當の尊嚴を保たせたものであつた。これに依つて、士族よりも少からぬ悪感を抱かれて居つた。恚ういふ深い因縁から、此時代に、とう〜、千載の一遇でもあるやうな得意顔になつて、一部の神教徒と結託し、之を改正するといふ名目の下に、異國の宗教だと貶して排斥したのである。殊に薩州の如きに至つては、淨土真宗を蛇蝎視して、一切國に入ることを禁じた位であつた。此の時分には、僧侶は食に窮し、前途を悲觀して、還俗したものが多かつた。目もあて

られぬやうな有様であつた。その事は別に話さうと思ふ。

動物の虐待

此のやうな始末で、精神的文明は地を拂ひ、物質的文明にのみ傾いて来た。今日よりこれを見ると、その時代の、いはゆる文明といふものより、其時代に非文明極まると罵られた徳川時代の方が、餘程文明であつたかのやうに思はれる。何故かと云へば、長足の片輪文明よりは、程度は低くとも、物質界と精神界とが程合よく歩行を並べて居た文明の方が吾々のいふ眞の文明であるからである。

溯つて、維新前に於ける一般の國民の精神修養はどういふ程度にあつたかといふに武士道が鼓吹されて、破廉耻心を起すものは比較して少かつた。之は上たるものが、精神の修養を勉めしめたからである。現代では、親不孝だからと云つて、法網にもかゝらなければ、別に之が制裁を加へるやうなこともないが、維新以前には、親不孝は、人倫

を破る大罪人として、時には極刑に處した例もあつた。又、一般に慈愛心が高まつてゐる、動物等に對しても、決して虐待するやうなことは爲なかつた。それが維新後になつてからは、年を趁うて虐待するやうになつた。働けるうちは働かせておいて、働けなくなると、之を屠つて食つて了ふ。弱肉は強の食といふのが自然の法則だと、今の人はい濟ましてゐるけれども、齊しくこれ宇宙間に生を享けたるもの、非情の草木だにも一切成佛するといふことすらあるに、苦も知れば、樂も知る、吾々人間と變りのないものではないか。これ皆精神界の文明が、物質的文明に反比例して退歩して来た較著なる證兆と見ることが出来る。其の後、動物保護會といふものが出来たけれども名ばかりで、一向に其の實が擧つてはゐない。

ところが維新前では、殺生禁斷の場所すらあつて、動物を保護すること一通ではなかつた。又一般の人にも、自然的に動物を愛護する念慮があつた。どうして此のうるはしい念慮が、さやうにも自然的に有つたかと云へば、之は、精神修養を説くところの佛教

が隆盛であつて、それを國教の如くに信仰して居たからである。

佛教のうちに『殺生戒』といふ戒があつて、いやしくも生あるものは、たとへ細微な蟲虻であらうとも、これが命を取ることが禁じ戒めてある。これ等の精神修養が深く心の底に根ざしてゐたからである。それが、維新以後、物質的文明の進歩するにつれて、精神的文明が退歩し、殺生禁斷の場所さへ解かれるやうになつて了つた。これは佛教を廢物同様に見て、精神修養の如何を顧みない結果である。

佛教家の當然の責務

であるから、日本の今日の文明は、まだまだ片輪文明の惡稱を甘受しなければならぬ。この分にて、少しも顧みるところなく、滔々として時流を趁うて已まなかつたならば、日本の將來は甚だ危殆な地位の上に立つやうなことになるはすまいか。轉た寒心に禁へない次第である。されば佛教を奉ずる者共は此の缺陷を救ふことに滿身の力を注が

ねばならぬ。

然るに當局が今日の方針といふものは、宗教には極めて冷かなる態度を取つてゐる。甚だ以て遺憾千萬だ。どうして、此の既に倒るゝの狂瀾を廻すつもりなのか。當局者の心事がとんとわからぬ。吾々は頗る之を疑問と思つてゐる。然しながら、佛教家としてのわれわれは、當局の方針の如何に拘らず、極力之を救済する方法を取らねなければならぬと思ふ。又それが佛教家の當然の責務ではあるまいか。

誠は不妄語也

ところで、精神の修養は、どうすれば宜いのであるか、學問の上から工夫して居ては頗るむづかしい。これに就いて趣味ある話が、小學といふ書に載つてゐる。

劉忠定公見溫公。問下盡心行己之要。可ニ以終身行己之者。公曰。其誠乎。劉公問。行己之何先。公曰。自不妄語始。劉公初甚易之。及退而自隱楯。身之所行與凡所

言自相制肘矛盾者多矣。力行七年而後成。自此言行一致。表裏相應。遇事坦然常有餘裕。

これを平易に碎いて見よう。

劉忠定公といふ人が、司馬溫公に面會した時、人が此の世に處して、一生懸命になつて身を修めて行くに就いて、一生涯之を行つて行くべき肝心要な點は何でありませうかと質問した。司馬溫公之に答へて、それは誠の一字であると云はれた。劉忠定公は、その誠の一字には幾多の意味もあつて、範圍が廣いから、其の誠を修めるには、何を一番先に行うたら宜しう御座いませうかと更に問ふ。司馬溫公答へて、その誠は、妄語しないといふことから始めて行くのであると云はれた。劉忠定公は、妄語しないといふこと即ち嘘をつかないといふやうなことは、何でもないことだと、甚だ之を軽く思つて引退つた。さて、それから、妄語しないといふことを修めにかつたが、行と言葉とを照りあはせて見ると、大抵矛盾して居ることが多かつた。劉忠定公は、これでは叶はぬ

と思ひ、妄語しないといふことを七年間を勉強した、そして遂に成功した。それからといふものは、言葉と行と一致し、表面も裏面も同じく、どんなことに遭遇しても、心が落付いて廣々とし、いつも綽々として餘裕があつた。

この司馬溫公の誠の一字をいはれたのは、まことの至言であつて、人たる以上は一日も之を忘れてはならないのである。誠の字は『信』の字によつても其の意味を表はし、信を『まこと』と訓ずることがある。信とは、人偏に言といふ字が合せてある。即ち人間の言葉とある以上は、必ず信でなければならぬといふことを痛切に示したものである。妄語は、本統から言へば言葉の資格がないものである。世がだんく〜と澆季になるにつれ、まことが無くなつて、妄語が盛に放たるゝやうになつた。否、今日の狀態では世界のことく〜が、殆ど妄語で堅めて居るといつても宜い位になつた。

しかしながら、此の誠なるものは、劉忠定公が、之を實行して困難を覺えたるが如くたい誠を守れ、と耳に聞いたばかりでは、甚だ易く、何でもないので、やうに見えるの

だが、さて之が實行といふ段になると、種々雑多なる困難事項が蟠つて、來て之が實行をさせぬやうにするなかゝ一通りの苦辛ではない。辛棒強くなつては、決して實行し終へることが出来ないのである。

で、誠を實行するには、辛棒強くなつてはならぬこと、即ち忍耐の二字が、蔭となり日向となり、始終添うて行かねばならない。實に忍耐は、誠を實行し、成功させる無二の良友である。釋迦牟尼佛が涅槃に入らせらるゝときも、忍の徳たることを、恰も子供にでも聞かせるやうに、繰返し説き聞かせられた。

されば、忍耐といふも、不妄語といふも、誠といふも、其の實質に就いて調べて見れば毫のかけりもない同一のものである。

大和魂は誠也

また大和魂は誠である、大和魂は、君に對しては忠となり、親に對しては孝とな

り、朋友に對しては信となる。忠といふも、孝といふも、信といふも、そのはたらきは一つである。それが大和魂であるからには、大和魂は即ち誠であると云ひ得らるゝのである。なほこの大和魂を學問的に分析すれば、忠と孝との二つの外には出でないことになる。

我が日本が百二十二代の間、皇統連綿として續き、君臣の大義名分の明かなることは世界のいづこにも無い、うるはしいことである。どうして斯様な立派な國體が持續されて來たか、これは、眞の忠義なるものが行はれてゐたからである。孔子は頻りに忠孝を説いた。けれどもその説き方が、日本に於いて行はれて居るやうには説かなかつた。其時代の形勢から、國體から考へてあゝいふ風に説かなければならなかつたからであらう。さて、我日本は、そもゝ神の御代より、眞の忠孝を以て國體を造つて來た。我日本と忠孝とは、切つても切れない、深いゝ關係を有つてゐる。然るに、彼の物質的文明の輸入されてからは、だんゝと精神界の文明が薄くなつて來た。若し、此の分て進ん

で行つたならば、將來どういふ結果を生むに至るかもわからぬことであらうと
紀憂に堪えぬ。

物質的文明の進歩が悪いとは云はぬ。まことに結構なことである。けれども、その進歩するにつれて、精神界の退歩して行くやうなことがあつたならば、決して喜ぶべき現象だとはいはれまい。今日の状態では、最早物質的文明も或る程度までは進歩して來たこの上は、精神界の文明を促すやうにして、我國體を、ますます泰山の安きにおくやうにと専心留意せねばならぬことと思ふのである。

人の口

天と地と人と

天を仰げば、日月星辰赫燦として光を放つて居る。地に伏せば、草木山河が整然として序を守つて居る。其の日月星辰は天の文であり、其の山河草木は地の理である。其の間位して居るのが人である。故に天と地と人を、之を稱して三才と稱されて居るのだから、人たるもの、尊いことは、今更にいふべきことではない。

天に文あり。地に理あれば、三才の一たる人には、何が有つて、天地と對等の地位を占め得るか。人には即ち道といふものがあるのである。

天には偽りといふものがない。太陽は朝に東を出て、夕に西に入る。之を間違へたことは曾てない。月が夜に出づるのを間違へて、眞晝中に出たといふことも聞かない。

陽來復されば春が来る。春が過ぎて夏、夏が去れば秋、秋盡きて冬が来る。此の四季の間違つたといふことも聞かない。

地も亦其の通りである。春が来れば花咲き、秋になつて實を結ぶ。夏は青葉が茂り冬は黄落して蕭寂の状を呈する。これを誤つたといふことは曾て聞かない。

天や地が、其の、己の職責を守つて、些しくも間違つたことの無いのは、どういふ道であるか。とりもなほさず誠の道である。誠とは、佛教でいふ不安語のことである。

天も地も、誠を守つて居る、誠を守つて居ればこそ、曾て其の自己の職責を誤らないのである、天地の間に位する人が、一日として誠を守らないでどうするか。誠を守るといふことは、天地人の三才の當然の約束であるのだ。

誠とは、曲つて居ないこと、すなはち真直なことをいふ、一體人の體は真直なものである、殊に人は誠、即ち正直でなければならぬことを、己に形から、現はして居る。動物には真直な形を有つて居るものがない、真直なのは人ばかりである。これは、真直の

道を行つて得た此身だから、更に真直な道を身に體して行つて行かなければならぬといふことを示し現はしたのに外ならないのである。

偽り無き言は即ち聖人の言也

さて不安語、即ち偽りといふものはどんなものであるか。いろなく悪事などは、之に依つて行はれるので、實に疎暴にして荒々しき性質のものである。しかるに、人の口なり、舌なりは、其の疎暴にして荒々しきことを言ふに適して居るか、どうか。口なり舌なりは、見たところから、己に柔軟で、うるはしい、偽りのない、正直なことをいふべく約束して出来たものである。されば、偽りは人の口なり、舌なりには、最も不適当なのである。人若し、この偽りをいはなかつたならば、其の言葉は、聽て經文と少しも變りのないものとなるのである。即ち、其の言葉は、すぐに聖人の言葉となるのである。天に向つて雨降れといへば、天は雨を降らすだらうし、風吹けといへば、天は風を吹か

すだらうし、地に向つて、花咲けといへば、地は草木に花を咲かすだらう。偽りの無い誠の言葉は、天地も感動せしめ、鬼神をも泣かしめるのである。二十四孝中の、竹の子掘や、氷を割つて鯉を求めたのや、これ皆、其の偽りなき誠が天地を感動せしめ、鬼神を泣かしたのに外ならないのである。

現代の社會を一瞥するに、すべてに於いて不真面目になつて居る。不真面目はとりも直さず偽りである。妄語である。道徳家があつて、時に之を罵倒して反省を促さうとすると、誠に以て、奇怪千萬な辯疏をする。曰く、吾々は不面目の悪いことは、よく承知してゐるが、傍が不真面目だから、自分一人真面目を通さうものなら、みすゞ損害を被らなければならぬ。損害を被ることを承知しながら、真面目を守らなければならぬ。までに、真面目の價値を認めることは出来ない。

これが今日の悪状態であるけれども、其の非條理非道徳なものには、呆れ返つて物が言へぬ。孔子も、曾て、「君子必慎其獨也」といはれた通り、人は何と曰はうが、そんなことはお構ひなく、自分は、自分で真面目を徹して行けばよいのである。恠ういふ辯疏をするものほど、一入に不真面目になつて、偽りを連發することになるのである。

この傾向は、殊に商業家に多いやうである。商業家には、權謀術策といふものが必要だといふけれども、私共を以て之を言はせれば、其の權謀術策は、いはゆる商業道徳といふもの、上に立つて居るのでなければならぬものかと思ふのである。商業道徳といへども、まさか、不真面目であれ、偽りを弄すべしとは教へて居まい。實業家に失敗者多くして、成功者の少いのは、要するにこの真面目を守らないからではあるまいか。宗教界の人にも不真面目になつて來た。口には喋々として道徳を説いて居るけれども、裏へ廻つては随分苦々しいことを行つて居る。眞實なことをいつて居つても、志が不眞實であるから、やはり、これも偽りである。

その他、教員然り、學生然りである。此等の弊は、物質文明に心酔して、短所までも併せて之を真似るからである。そして、眞實の言葉の、如何なる廣大なる功徳の有ると

いふことを知らないからである。私は、こゝに眞實語の功德の、かやうにも廣大であるといふ實例を話したいと思ふ。

象の安産

これは律藏の中に出て居る話である。

昔、印度の然るところに王様があつた。この王様の寵愛して居らせらるゝ牝の象が妊娠した。さて月満ちて分娩時になつたが、見るに得堪へぬほどの苦しみをして居るが、更に生れる様子もない。此の時分には、現今のやうに獸醫といふやうなものゝ有らう筈なく、王様は如何せんかと思案に暮れて居らせられた。其の間も、象の、刻々に苦しむ様子を見て、不憫さに、居ても、起つても居られないやうな心配をせられたのである。漸く一計を思付いて、俄に後宮の官女を一堂の中に呼集め、おん身等の中に、眞實語を有つて居る者は無いか、眞實語に、廣大なる功德を有つて居る。其の眞實語を以てせば

彼象は安産するに違ひない。誰が眞實語を有つて居るか。眞實語を有つて居る者には、恩賞、心のまゝに得させると仰せられたが、一人として眞實語を有つて居る者はなかつた。王様は落膽して居らせられると、末座に控へた一人の下官女が、王様の前へ出て、鳥辭がましようはございますけれども、私は、どうやら、其の眞實語を有つて居るかのやうに心得て居りますと言上する。王様は喜ばせられ、さらば汝の有てる眞實語を唱へて、早く彼象を安産させて見よと仰せられた。

で、其の下官女は、象の傍へ寄り添つて、私は、自夫の夫以外に、仇し情を持つたことのない事ばかりでなく、曾て、自分の夫以外の男に、塵ほどといへども戀愛の心へ向けたことがござりませぬ。この私の眞實の言葉に感じて、どうぞ安産してくださいといった。すると不思議なるかな、象は一息に安々と子供を産みかけた。しかるに如何したことか、子供の尾の方まで來たら、つと止まつて了つて、早速に出ないやうになつた。王様は、不思議に思つて、かやうな眞實の言葉なるに、どうして、かやうなことに

なつて生れ切らぬのであるか、若しや、汝に少しにても、其の以前に然ることがあつて、それが今眞實といった言葉に矛盾して居るのではあるまいか。よく考へ見よ。と王様は仰せらるゝので、彼の下官女は、しばらく打案じたが、はたと膝を打ち、これにて思ひあたることをござります。まだ幼くて民間に在る時でございました。私は、然る家に雇はれて男の子の子守奉公に参りました。其の子供を可愛いと思つたことがございます。それが障りをいたしましたのでござりませう。あゝ、畏ろしや。今は懺悔いたします。と曰つたら、彼の象は、事なしにすつと安産して了つた。之を一場の座談ぐらゐに聞いて呉れては困る。眞實の功德の廣大なることを悟る一大資料として珍重してもらひたいのである。これが分かれば、加持や、祈禱に功德のあらはれるのは、何も不思議ではないのである。

口罪の區別

殺生の罪を犯すには軀體を動かさねばならぬ。坐つて平然として居ては犯すことが出ぬ。偷盜の罪を犯すにも、邪淫の罪を犯すにも其の通り、比較的、勇力と思考力が費される。しかるに口に至ると、坐つてゐて、平然として、極めて容易に、僅に三寸の舌一枚で、種々な罪を犯すことが出来る。今口に於いて犯さるゝ罪を概括すると、妄語、惡口、兩舌、綺語の四種となる。

妄語

嘘は方便など、云つて、勝手にの宜い理窟をつけて居るが、眞正の理から見れば、決して方便などになつて居るものではない。嘘をいへば、既に自己を欺いて居るのである。自己を欺けば、已に人間天然の果報を没却して了つて居るのである。といふことは已に前に述べて來た。

悪口

根柢の有る悪口と、根柢の無い悪口との二種に區別す。人の非行を摘發するのは、前者に屬する悪口で、無實を言ひかけるのは、後者に屬する悪口である。さて世間では、普通『人の非行を摘發するのは、彼に其の實があるから差支ないけれど、無實を言ひかけて、其の人を罪に陥れたりするのは、憎みても餘りあり』と言つて居るが、佛教の方では、この反對になつてゐる。佛教の方では、根柢の無いことをいふよりか、根柢の有ることをいふのを憎んでゐる。何故ならば、其の人に非行の根柢があつて、之を摘發すれば、其の人は最早其の罪を逃るゝことが出来ないのである。今、根柢の無いことを有るやうに無實を言ひたてると、或る時間内は、其の人を苦めることになるけれども天網恢恢、忽ちに其の人は、晴天白日の身となること、蓋し天理の自然である、されば、其の人をどこまでも苦しめるといふことにはならない。さて對手が悪人にしろ、善

人にしろ、苦しいと思ふ念は同じである。して見れば、悪人なればとて、之を長い間苦しめることになるやうな悪口は、決してすまじきである。さればとて、私は、根柢の無い悪口ならば差支ないから、どしどし實行しても宜しいと進めるのではない。詩經にも、讒言を構ふる者、即ち根柢の無い悪口を言ふ者を、『如虺如蜮』と憎んでゐる通り、聖人、賢人、善人を傷害すること一通りでないから、根柢の無い悪口をいふものはまさしく、天地の間にも容れられざる大悪人であるには違ひないのである。私が前のやうに言つたのは、之を要するに、大學にも『與其有聚斂之臣、寧有盜臣。』といつたやうな、いはゆる比較論法であつたことを忘れてもらつては困るのである。それは兎に角に、抑も悪口は、どういふところから起つて來るか、大抵の場合、自分の心のまゝにならぬといふ、即ち勝手な心から起つて來るのである。しかし、この心のまゝにしたいといふやうな勝手は、無理な註文で、巨細にしらべて見ると、世界すべての事象は、決して那麼勝手な心のまゝになるものではないのである。佛は、この世界

を娑婆といはれた。この娑婆といはれたのを味はつて見ると、二千年の昔から今日にいたるまで、此の世界は、心のまゝにすることの出来ぬ世界であるといふことがわかる。そも／＼娑婆とは、之を支那譯にすると忍耐となる。されば心のまゝにならぬのを忍耐して行かなければならぬ世界だ。自分も忍耐する、他人も忍耐する。互に忍耐し合つて行けばこそ、社會は圓滿に、安穩に、平和になる。此度の歐洲の大戦争に見ても、獨逸が心のまゝにしようと思つたのが原因となつてゐるのではないか、忍耐が無かつたのが原因となつてゐるではないか。

人を害し、國を害し、社會を害する。悪口ほど恐しいものはないのである。そも／＼悪口が必然的に口や舌から出るやうに、人間の口や舌は始めから作られたものであるか何うか。この疑問を解決せんには、むづかしい哲理より第一に、其の口や舌を篤と見て直ちに了解するものである。口を見よ。やさしく、うつくしく出来て居る。舌を見よ。やはらかく、物にも堪へがた氣に出来て居る。齒を見よ。皓くしてうつくしく、且つ脆

く出来て居る、この口に相當したものは、うるはしい正直の言葉が出なければならぬ筈だ。かういふ果報を見ても、此の口や舌を有つて生れて來た人は、必然の理として、うるはしい正直な言葉を出すべき筈なのだ。

されば、忍耐を守つて、それで、物を言はなければならぬ時は、必ずうるはしく正直な言葉を出さなければならぬのである。且つ、口は禍の門なることを戒め、『物いへば、唇寒し秋の風』と注意してもらひたい。忍耐といふことについて、面白い逸話が有る。

唐の麟徳年中、即ち我朝の齋明天皇の御宇にあたるが、其の時の天子高宗が、泰山に封じた序に、張公藝といふ者の邸へ御幸になつた。泰山に封ずるとは、これは、支那に於ける、天子一代に一度の催して、天子が位に即くと、其の事を山の神に告げる爲に、其の山へ行つて、土を高く盛つて山の神を祭ることがある、それをいふのである。さてこの張公藝といふ人の家は、九代まで打續いて、一家門揃うて同居して居た。そして仲

睦じく、曾て其の家門より怨嗟の聲の出たことを聞かなかつた。されば、北齋の時代にも隨の時代にも、其の一門を旌表した。今高宗は直接に其の邸に御幸されたのである。そして近く張公藝を前に呼び寄せて、どうして、かやうに九代も打ちついで、一門が同居して居ても、曾て喧嘩の一つもしたといふことの無い迄に仲よく暮して来たのか。其の理由が聞きたいとの仰せてあつた。すると、張公藝は、召使の者に紙や筆を持つて來させて、『忍』の字を百餘りも書いて天子に進奏した。くどくどしく奏上するのは畏れ多いから、たゞ『忍』の字を書いて進奏したのであるけれども、其の心根を計つて見ると、まさしく慙ういふ意味であらう。

一門宗族の仲の悪いのは何の原因するか。尊長と下の者との衣服食物乃至は禮儀に懸隔がある爲である。しかし、この懸隔を取除いては一門宗族を締括つて行くことが出来ぬから、之のみは尊重して行かなければならぬ。之を尊重しないことになる、こゝに不平が起り、喧嘩が始まるのだ。そこで、誰も彼も、皆々これが自然の法則だと思つて

たゞ『忍』の一字を守れば、一門家族は益々仲よくなるのである。

これによつても、其の『忍』の功德の廣大なることはわかる。しかしながら、『忍』と輕くいふけれども、行ふに却々至難を覺える。堪忍袋は、破れては縫ひ、破れては縫はなければならぬのである。

名前と正確な時代とは記憶して居らぬが、何でも徳川時代であつた、或る大名の門扉に、殿の稅政悪行を罵言讒謗して張書をしたものがあつた。家老にありたる人は、之は殿に申上げようか。申上げずに置かうかと、とつおいつしたが、何しろ、事が重大で申上げずに打擲つておく譯には行かないので、勘氣を受けた時に屠腹する積りで、其の張書を懷にして登城した。申上げたいことがございませうと言上に及ぶと、何事であるかと、殿は正殿に參られて家老に面謁される。家老は思切つて、事の次第を申上げた。何とや、余を罵言讒謗したと申すかと言ひながら、其のまゝ奥へ這入つて行かれた。家老は、それこそと、顔色菜の如くになつて、いよゝゝ期待した通り屠腹といふことに定

めて居ると、殿は上下をつけ、手を洗ひ、口を漱いて來られて、其の張書を見せよといつて家老から取つて、之を押戴き、これは余の臣下の致したるものと心得る。あゝ、余の臣下にも、これほどまでに余を思ふものがあつたのか、書中ことごとくは當つて居らないやうでも、中には随分に氣のつかざるところもある。余は、まことに満足に思ふよ。この張書をした者を探し出して、然る可き恩賞を取らせてよからうと曰はれた。この逸話についても、『忍』の字の守らざるべからざることば明かになつたであらう。

兩舌

一枚こそ無い舌を二枚に使ふから悪いのである。兩人の仲のよいのを見て、ねたましくなり、甲には乙を、乙には甲を讒訴して之を離さうとする。この語を離間語といひ、此の策略を離間策といふ、敢て人に於てのみならず、國に於いても然りである。一體離間語離間策といふものは、對手を倦め込むに、容易な時と、不容易な時とあるが、しか

し、其の不容易な時でも、之を行き通さうと思へば、目的を達し得らるゝものである。一度云つて聞かざれば、二度之をいふ。二度云つて聞かざれば、三度之をいふ。大抵信じさせるから、其の害毒たるや恐ろしいものである。度々すれば、信じ得られないことでも、遂に信じさせられることは、曹參の母の例を見てもわかる。

曹參は、世に聞えたる親孝行の息子であつた。或る日、曹參の母が桴を織つて居るところへ、村の者が走つて來て、曹參さんは、先刻隣村で人殺しをなされましたといふこととですと云つたが、子を知るは親に如くはなして、母は、曹參のやうな孝行者が、こんなことを仕出かすはずがあらうかと思ひ、返事もせず、笑つて平氣で桴を織ることを已めなかつた。しばらくたつと、又一人の者が來て、曹參さんが、人殺しをしましたと云つた。また母は平氣で居た。すると、又一人の者が來て、曹參さんは人殺しをしましたと云つた。この三度目で母は顔色青くなり、桴を已めて、一生懸命に表へ飛び出した。ぐづぐづして居ては、役人が來て、連座の罪に問ふべく吾身をも引張つて行くだらうと

思つたからである。後にて聞けば、同名異人の曹參といふものがあつたことがわかつたけれど、一時は、曹參の母といへども、信じさせられて了つたのである。これは、史記に出て居る話だが、度々すれば、信じさせられるといふ好適例とすることが出来る。洵に二枚舌を使つて、離間策を弄することほど、憎むべき仕打は他に見ることが出来ないものである。

綺語

換言すれば戯論といふことになる。言葉に綺をつけて人を弄ることである。前にもいつた通り、人の體軀は真直で、先天的に正直の道を守らなければならぬ約束になつてゐるものを、いくら權謀の上からとはいへ、こんな戯論を吐くのは、大に間違つてゐる話ではないか。

そして、一概に綺語といふけれども、巨細に調査してみると、其の範圍は却々に廣い、

論語に『巧言令色。鮮矣仁』とある巧言も、このいはゆる綺語である。綺語を吐いたとて、敢て罪になるべきほどの事はないと思つてゐるものが多いやうだが、天の正直、地の正直の間に立つた人が、ひとり正直でなくて綺語を弄するのは、自然の果報にも矛盾してゐるではないか。太陽が夜出たといふ巫山戯た真似をいつしたか。地に於ても其の通り、巫山戯た真似をいつしたか。天變地妖のあるといふのは、人が悪いことをするから、天地を怒らしたのに外ならぬのである。

この妄語、悪口、兩舌、綺語の四つが守れないのは、各自に私といふ心があるからである。尙くも、私といふ心を除き去らなければ、正直の道は、すぐに行はるゝやうになつて、人は安穩に、國は平和の状態にかへるのである。

父母の恩

袈裟に換へたる米

世の中に、父母ほど尊いものが又と有らうか。世界あらゆるの國に於いて、あらゆるの修養を説いた教にして、苟も、父母を尊ぶことを奨励してないものがあるか。儒教にも、『父母は天也』ともあつて、天の徳と父母の徳とを一致させて居る。我が佛教においても其の通りである。佛は無上の尊者である。けれども、今、父母と佛とを前に並べてさうして兩立して尊敬を拂ふことが出来ない場合、即ち佛に供養を竭さんとすれば、父母には供養を竭すことが出来ぬといふ場合、吾々はどちらへ偏りて供養を竭すべきか。矢張佛は捨て、も父母は尊ばなければならぬのである、これについて釋尊は、聞くだに涙の滴れるやうな逸話を残して行かれた。

其の事蹟が、律藏といふ經文に出て居る。釋尊の、まだ御在世の頃だつた。印度では天災地妖打ち續き、五穀稔らず、餓孚野に満ち、叫號の聲、悽慘を極めて、如何なることになり行くのか。考へることも出来ない位であつた。されば釋尊に於かせられても、幾日も食事といふことをなさらずに過ぎて居られた。御弟子どもに於ては、之を痛く心配し、どうかして、釋尊に一碗の御食事でも進めたいものだ、東奔西走、數十里にまでも往つて、其の米を漁り求めた。かくて、漸くに、或る所に、或る豪農があつて、これが幾干かの米を貯藏して居るといふことをたしかめた。

どうか譲つては呉れまいかと頼む。この先、いつまで饑饉が打續くことやら知れぬ。米は命の糧である。この貴重な命の糧が、どうして安々と讓れることが出来ませうやと、にべもなく豪農は謝絶したのである。

いかなる財寶を興へようといつても、彼豪農は交換することを肯じない。御弟子は千思萬慮の末、しからは、佛教徒が、身にも換へがたき此の袈裟を興へるから、少しなり

とも交換してくださいと切願したのである。

袈裟の徳は廣大なものである。之を所持すれば、種々な災難を拂ふことが出来るとかいふ。まことに、袈裟とならば交換しても宜しいと豪農は答へた。それで、御弟子は袈裟を脱いで彼に與へ、彼から少量の米を得て、急いで歸つて來た。

さて、早速此米にて粥をこしらへ、釋尊に供養申上げた。如何に釋尊が御喜びなさるか、御弟子どもは、胸も騒ぐ程な思をして、其の時の釋尊の御心持を推察した。かくて其の膳部を釋尊の前に供すると、釋尊は、威儀をつくるはせられ、今饑饉に接し、一粒の米といへども、之を得るに由なしといふに、この得がたきものを、如何なる所に如何なることをして求めて來りたるかと問はせらる。御弟子は、ありのまゝに答へた。

さらば、なほ更之を食することは出来ぬ。功德の廣大なる袈裟と交換したりといへばこの米は袈裟の功德を含んで居る、吾、如何に饑えて食を欲するとはいへ、如何にして之を口に出ることが出来ようと釋尊は仰せられて、箸だにおつけなさらなかつたのであ

る、御弟子は、之を聞いて、泣き悲しんだれども、如何ともすることが出来なかつた。遂に御弟子は、しからは、この米は、どういふ資格の人にして、之を口に出ることが出来るのでせうかと尋ねた。すると釋尊は、泣然として涙を流させられ、袈裟と交換したる米ならば、父母に供養するより外にはないと仰せられたのである。

釋尊父母の棺を昇く

父母の恩の至大なることは、この逸話でも、よくわかるが、更に今一つの逸話を語らう。

釋尊の御父君にあたらせられ給ふ淨飲大王が御崩去遊ばされ、御葬儀の折に、釋尊は尊貴の御身分でありながら、自ら父君の棺を昇かうと仰せられた。その御弟子共は驚いて、恐れ多いから、吾々がお昇き申さんと拒むと、釋尊は、父母の恩は廣大である、其の廣大なる恩を忘れて居るものが世の中には多い。殊に、澆季の末世になつたならば、

遂に父母の恩すら忘れて了つて、却つて不孝をして父母を泣かせる者が多くなるに違ひない。で。父母の恩は忘るべからず、たとへ死後といへども、父母は粗末にするものではないといふことを衆人に知らせん爲を思うて、吾はこの父の棺を昇かなければならぬと曰はれて、遂にこの父君の棺をお昇きになつたのである。其の至孝、天に通じて梵天帝釋が天より降つて、釋尊を助けて、釋尊をして力を要せしめないやうにしたといふこととである。されば、彼の周密禪師は、釋尊を讚嘆して、『大孝釋迦尊』と曰はれた。

母の肖像畫

で、父母には、孝養を竭さざるべからざることは、すでに縷述して來たが、最後に孝行を、かほどまでに心掛けても居るものかと思はるゝ位、趣味ある逸話を紹介しておきたいと思ふ。

私の郷里に霞山といふ畫工があつた。狩野派の流れを汲んで、地方では相當の名聲を博して居た。私が、この畫工から直接聞き込んだ話である、

此の畫工が佐渡島へ漫遊したことがある。或る日、一人の男來り、是非先生に御願したい畫がありますと曰ふ。如何な畫かと尋ねると、私は、幼にして母にわかれまして。母に受けたる恩のほどを思ひ出すと、ありがたさ、慕はしさに、涙の流るゝのを禁ずることが出来ません。けれども、人は何事に依らず、日數を経るに従つては疎くなるものでございます、若しも、此の報ずることも出来ないやうな尊い親の恩を忘れるやうな時代が來ましたらどうしませうか。せめて、左様いふ時代が來ないやうにと、私が母に抱かれて、食物を喰べさせてもらつて居る畫を描いていたゞいて、死ぬるまで、一日も母を忘れないやうに心掛けたいのでござりますると、涙の聲でたのむ様子が、其の誠意如何にも眉宇の間に顯はれてゐるので、彼の畫工までも情に曳込まれて泣いて了つた。畫工も大に満足し、從來に、かやうな誠意を籠めた依頼を受けたことがない。私も

大に筆を振つて御依頼に背かないやうに力めませうと心克く承諾した。

彼の畫工は、此迄にない努力を拂つて描きあげた。完成した事を先方へ通知してやると、件の男は、羽織袴にて、恰も他國に居て、郷里から呼び寄せた母を出迎へにでも出るやうな心持と服装とで受取に來た。これならば、嘸かし喜ぶだらうと、畫工は誇張した心持になつて、吾と吾が畫の旨く描けたのに感心して居る。

其の畫材は、母が縁端に腰を掛けて、膝に抱いた赤兒に物を喰べさせて居るところである。彼の男は、畫の前に端坐して姑く凝視して居たが。咄々、更に喜ぶやうな様子もないのである。畫工は不審で堪らない。はては氣が焦々して來て、これではお氣に召さないのですかと詰責するやうに問うた。はい、どうも、少しと彼の男は合點の行かぬ風である。畫が下手だと仰しやるんですかと詰込むと、いや、却々以て、御上手に出來て居ります。しかし、甚だ懼れ入る次第ですが、少許先生には御考へ落しの處がお有りのやうに思ひまして、それで……といつて居る。何が落ちて居りますか、はい。此の畫の

中の母は、眞の母ではなく、どうも後母のやうに思はれるのでございます。といふ次第は、親は子を思ふ念が一通りではありません。たとへ、子供が食事をして居るのでも、恰度自分が食事をして居ると同じ心持になつて居ります。親と子との口は合はせて二個あるけれども、煎じ詰めば一個であります。この畫の母は、赤兒に食物を與へて、赤兒が口を開いて居るのに、自分は口を閉いて居ります、眞に子を愛する心のある母だつたら、自分も口を開いて居らなければなりません。どうも、この母では、私ばかりは、眞の生みの母とは思ふことが出來ないのであります、どうか口を開けさせてくださといつた。

孝情の厚い子でなければ、こゝまでの觀察は出來ない筈である。畫工は、膝を打つておん身の爲に、新知識を得ました、感謝しますと曰つて、更に彼男の得心の往くやうに描直して遣はしたといふことである。

國王の恩

酬ゆる能はざる高恩

國王の恩とは、日本に當ていへば、天皇陛下の恩といふことになる。吾々を生んでくれたものは父母である。父母ありて、始めて吾々は出来て来たものである。また、父母ありて、かやうに生長して来たものである。

父母の恩を思ふとともに、又陛下の廣大なる恩をも忘れてはならぬ。今假りに、上に天皇陛下がおはせられなかつたとする。どういふ結果になるであらうか。天下は麻の如く亂れ、弱者は強者の肉となり、一日として安泰にして居るとは出来ないであらう。又たとへ、上に天皇陛下がおはしますとしたところが、恐ろしいことであるが、もし御善政を御布きくださらなかつたと假定する。弱者は強者の肉となると云つたやうな野蠻

時代の状態でなくとも、矢張は薄水を履むの思ひあるべく、財寶は散亂し、危なきこと憂きこと、悲しきことのみ逢つて、一日として生を安んずることの出来ないことは同じである。近い例に見てもわかる。袁世凱は、支那を分捕つて、中華民國と稱し、帝位にまでも昇つた。善政なく、徒に、自家の私欲を満たすばかりであつたから、幾億の民庶は、塗炭の苦しみに逢つてゐる。其の後間も無く崩御したから、更に天下は亂れ、民庶は、見るも哀れな境遇に沈淪して居る。

今日、吾々が、安泰に、悠然として、各自其の職に安んじて居るのは何故であるか。一に至尊天皇陛下が上におはしまして、御善政をお布きあそばされ、吾々を御あはれみくだされて居らせらるゝお蔭である。不吉なことをいふやうだが、彼の日清戦争にしてもし我が日本が敗北を取つて居たとしたら、どうであつたか、日露戦争にして、もし我が日本が敗北を取つて居たとしたら、どうであつたか、今日のセルビヤの如く、今日のモンテネグロの如く、今日の白耳義の如く、悲惨極まる結果を見たに違ひなかつた。し

かるに、我が日本は、固より外國に敗北を取るやうなことは萬も無かつたのである。これ忠勇武烈の日本魂の然らしむるところとはいへ、上に聖明な陛下のおはすありて、稜威赫灼として、已に彼を畏服せしめられたるものがあつたためである。

思うてこゝに至ると、この高恩の廣大無邊なることは計り知ることが出来ないのである。讚嘆しても、其の高恩の萬分の一をも言ひ表はすことが出来ない。又此身を百裂にして報ぜんとしても、其の高恩の萬分の一にも該當することは出来ないのである。

暗涙滂沱

大陸の傍に介在したる蕞爾たる小國にてありながら、支那にも勝ち、露西亞にも勝ち、國威宇内に輝き、嶄然として列強の上に位するやうになつたのは、之を要するに往時我國の運戦連勝は、陛下の威稜高く、其の神聖なる高德、五千萬の同胞を包容して洩らさせ給ふことなく、同胞も其の高徳を身に體し、君に忠義を申し上げたからである。父

母の恩を知れば、併せて陛下の恩を知らなければならぬことは申すまでも無いことだ。

二條天皇は、大寒中の夜半に、御衣をお脱ぎあそばされて、前に居る子供にでも着せさせ給ふやうにふらわりとお擴げあそばされた、天寒くして、風強く、夜色方に閑なる時であつた。左右の者は驚いて、此の寒き夜に、何事をせさせ給ふにや。玉體に恙あらせられたまひなば、事も畏し、着させ給へと申上ぐれば、今宵は殊の外に寒さをぞ身に覺え侍る。つらく、惟んみるに、民は、たとへ朕をば父と思はずとも、之を治むる上に立つ朕より見んには、均しくこれ朕の子にてはあらずや。數多の中には、果報拙くして乞食ともなり、住むに家なく、食ふに食なく、この寒き夜を、あちらの軒下にたゞずみ、こちらの軒下に、踞りつゝ居る者有りなん、朕は、それ等の者に着せつかはする心組にて脱ぎつるなりと仰せられて、兩眼に熱き御涙を湛へさせられた。之を聞いた左右の者は均しく泣かざるを得なかつたといふことが歴史に出て居る、この思召のあらせ給ふことは、ひとり二條天皇御一人のみではない。御歴代ことごとくこの大御心のおはし

ますることは申すまでもないことである。殊に吾々は、憊ういふことを洩れ承はつて居る。或る一年、饑饉があつた時、明治天皇陛下に於かせられては、三度の御食事をお減しに相成つて、貧しき者は食に飽くことをせず、朕ひとり食に飽くことを得んやと仰せられたとか。

憊うも天皇陛下の恩の廣大なるに、却つて之を忘れて居る者の有りはしまいか。

相互の恩

孔雀來り鶴來る

元始時代に遡ぼつて見れば、此の世界は、人類、動物、山河、草木等すべてが相寄り相助けて作つたのである。といふのが佛教の哲理的研究の説になつて居る。して見れば人も、獸も、蟲も、山も、河も、草も、木も、みなともに此の世界を作つた上に同等の權利を有つて居るから、萬物の靈長だと云つて、己獨り暴威を振つて、他の動物等を虐待すべきものではない。

たとへ、微細な一塊の礫でも、煎じつめれば、吾々の友人である。印度では、この觀念が盛んであつたから、孔雀も、鶴も、平氣で人に近づいて來た。人も亦、吾が友としてこれを優遇した。弓等を擬するは、以ての外の事のやうに思つて居た。現在でも、こ

の觀念の名残があつて、牛を神の御使だといつて讚へ、不意に出て来て、店の菓子などを食つて往つても、これを追ふことこそはすれ、鞭を上げて打つなどのやうなことは曾て無いといふことである。

木の枝等をも折らぬから、今に三千年來の古木が、依然として残つて居るとかいふことだ。かやうに、南方文明が、非情の山河草木等に對してまでもうるはしい觀念を有つて居るのは、一に宗教が興へたる精神修養が然らしめたのに外ならないのである。即ち物質の方より精神的の方に向上したのである。

北緯五十度以上に位して居る獨逸あたりのいはゆる北方文明は如何。抑々元始時代から『己以外は皆敵也』といふ觀念を有つて來たのであるから、今日に至りても、己以外の物は何物をも、之を己に服従せしめなければならぬといふ横暴な觀念を漲らして居る。牛も殺せば、馬も殺し、何事も物質的で行かうと力めて居る。即ちこれ等の横暴な振舞は、ことごとく、自己を中心とした利害關係から打算して居るのである。南方文明

と北方文明とは、已に其の根柢に於いて大なる相違を作つて居たのだから、今日、北方文明に心酔して居る者が、輕薄で、たゞ我利を逞しうし、理窟を詳らかにするに汲々として居るのは蓋し理の當然である。

徳を以て仇讐に報ゆ

これで、人物、山河、草木、皆和融して居るといふのが眞理であつて見れば、吾々も山河にも、草木にも、恩がある。況んや、人物に於いておやである。これが即ち衆生の恩といふものである。

卑近な例を取つて語つて試みよう。麻や、綿は、吾々を暖かにして呉れるから、麻や綿は吾々に恩がある。そのかほりに、之を培養したといふ恩を吾々は麻や綿に有つて居る。

大島紬は、大島の人々が織つた。故に吾々は之を衣服にすることが出来る。されば、大島の人々は、吾々に恩を有つて居る。そのかほりに、吾々が之を衣服にすればこそ、大島

五二
の人が之を織つて、之を金にすることも出来るのだ。して見ると、吾々も亦大島の人に恩をもつて居る。

日本は歐米に諸機械を注文する。故に歐米は日本に恩を有つて居る。そのかほりに、日本が之を注文すればこそ、歐米は之を作つて輸出することも出来るのだ。されば、日本も亦歐米に恩を有つて居る。

この相互の恩の有ること、即ち衆生の恩の有ることが、そも／＼人道の根柢となつてゐる、これを離るゝやうな人道だつたら、名は人道といふとも、決して其の人道の實は有つて居ないのである。恩なるものが、かやうに隨所にあるのだから、之に報ゆるには必ず徳を以てしなければならぬことである。即ち仇に報ゆるにも徳を以てしなければならぬ。仇に報ゆるに徳を以てせよといふことは、一面から考へると、甚だ非條理なやうでもあるけれど、仇讐を復して心に愉快と思ふのは、衆生の恩を辨へざる者の仕方といはなければならぬ。こゝに至ると、儒教とは少しく其の見地を異にして居ることが認め

られる。孔子は、

『恩に報ゆるには徳を以てせよ。仇に報ゆるには、直なる道を以てせよ』

といはれた。直なる道といふに、吾々は少々嫌らぬところがある。親が無理であつたために殺されたのに、之を遺憾に思つて、其の子が親の仇を復するのは、直なる道ではない。親は無道をせず、即ち何等殺さるゝほどの落度も演なかつたのに殺された。恁様時に仇を復するのは、直なる道である。即ち、孔子は、後者の場合には仇を復しても差支へないと明言されたのである。佛教の方では、此場合にも、矢張り徳を以て報うべきことが教へて、人は人ならずとも、吾は吾たらざるべからず、左様な残忍なことは、衆生の恩を思ふものゝ到底なし能はざる所だからだ。

平和とは融和也

元來人といふものは、自分一個では世の中が渡れぬ。人といふ字の會意を考へても了

かる。一本の棒を、一本の棒が支へて居る。助けて呉れる人が無かつたら、何事も出来ないことを、已に明かに語つて居るではないか。されば、使ふ人は、使はれる人に恩があり、使はれる人は使ふ人に恩がある。一家を経営して行くに就いても其の通りである。大小、貴賤、貧富の上に就いても其の通りである。敢て、人のみならず、米が無かつたらばどうする。水が無かつたら、どうする。火が無かつたら、どうする。承陽大帥の宣下號を賜はつた道元禪師は、曾て、

『水を粗末にするな』といはれた。水といへども、衆生の中の一個である。之を粗末にすれば、不隱徳といふことになるから、其の結果始終貧乏をする。

すべて衆生の恩を了解すれば、即ち人道を解した人といはれるのである。人道を解すれば、諸事萬端必ず平和に行く。

平和に行くといふことは、和融するといふことと同じである。和融するといふことは即ち人物、山河、草木一切相和融して行かなければならないことである。水に水を投じ

た如に行かなければならないことである。水の中に油や牛乳を投じたのでは、和融したといふのではない。即ち和融して、互の恩を知つて、互に徳を以て相報い合ひをしなければならぬのである。しかしながら、その恩に報ゆることは、其の實行が却々至難い。どうして報ゆるか、前々よりも縷述して來た通り、徳を以つてしなければならぬのであるから至難いのだ。これが即ち人道である。『道は平生の所に在り』といつてあるから甚だ行ひ易いやうに見えるけれども、兎角、吾々凡夫は、其の報い方が知られない、即ち世間の人から讃められたいと思つて行るから、邪道に陥つて了ふのである。『徳は隠れたる所に在り』ともあれば、人の見ない所、即ち縁の下に於いてするのでなくてはならぬ。縁の下の金箔など云つて、世の中の人には、徒爾に屬するやうにも思ふだらうが、決してそんなわけのものではないのである。隠れたるより顯るゝは無して、善事は自づと必ず人に知らるゝやうになるのである。

道の實體は正直也

さて、道といひ、徳といふが、一體其の道や徳やは、どんなものであるか。其の實體はどんなものであるか。今之を平凡に解釋して試る。

道の實體は正直である。正直の頭には神やどるとも云つて、正直なれば、すべての行は、極めて順調に、極めて真面目に行はれて、さうして自然的に幸福を得るのである。道は、古人も『大道直きこと髪の若し』と云つた通り、少しの曲もないことである。次ぎに、徳とは恵むといふことである。道の實體なる曲りの無い正直の上に立つた恵みである。なほ俗にいへは、なまけといふことである。なまけとは美しい人情のことである。論語の中に

「葉公語ニ公子曰、吾黨有ニ直レ躬者。其父攘レ羊、而子證レ之。孔子曰、吾黨之直者異ニ於是。父爲レ子隱、子爲レ父隱。直在ニ其中一矣。」

の一章がある。之を平たく譯して試よう。葉といふ國の殿様が、孔子に向つて、先生、お聞きください、吾が城下には、至極な正直者がござる。其の父が隣家から此方へ這り込んで来た羊を盗み取つたと云うて、其の子が父を訴へて来た。何と感心な正直者ではござらぬかと鼻高々に云はれたら、孔子は、別に感心した様子もせず、吾々の在所に居る正直者は、殿様の御城下に居るところの父までも訴へるやうな正直者は居りませぬ。正直の持方が全然變つて居ります。父は、たとへ子供が悪事をしようが、子供を罪に陥れるに忍び無いで、及ぶだけ隠すやうにします。又子供は、たとへ父が悪事をしやうが、父を罪に陥れるには忍びないで、及ぶだけ隠すやうにする。冷かな眼を以て見れば、不正直なやうでもありますが、しかし、これでこそ眞の正直の心持があるのだといふことが出来ます。――

子は父の爲めに、父は子の爲に隠すといふうるはしい心が、正直であつて、徳であつてそして情である。

されば、兎にも角にも、人と生れた以上は、道を行ひ、徳を修めて行かなければならぬ。道を行ひ、徳を修めて行かなければ、人面にして獸心である。痛しきかな、今の世の人は、たゞ々々北方文明の悪いところだけを取つて、いはゆる人道を迂遠なりとして行ふものが殆んどない。否、之を忘れて了つて居るやうだ。或る處に甚い物忘をする男があつた。有らうことか、有るまいことか、引越をして、自分の妻を忘れて了つた。この事を聞いた孔子は、さうであらう、そんな物忘ぐらゐは何でもないことだ。私等が一門には、身を忘れて居るものすら有るといはれたことがある。身を忘れるとは、即ち自分の身を忘れるといふことで、人として人たる道を踏むことをせず、今に自分の身の亡び行くのを知らずに居るといふとである。これはまことに至言である。金言である。人たるものは、先以て此の己の身を忘れず、道を踏み、徳を修めることを忘れてはならないのである。

三 寶

三寶の廣義

三寶とは、佛、法、僧の三をいふ。佛とは、釋迦牟尼佛のことである。法とは、佛の經文等をいふ。僧とは、ひろく經文を傳へて衆生界を救ふ人をいふ。何故「寶」の字をつけたか。寶とは、この三は、吾等一切衆生を罪惡の中から救上げて、悲しみを抜き、安心立命の地位を與へ、無上菩提の樂しみを享受せしむるものであるによつて、寶といつたのである。

この三寶を少しく研究的に云つて見ると、三種に區分することが出来るのである。即ち同體の三寶、別體の三寶、住持の三寶の三種となる。

同體の三寶

三世十方の諸佛は、其の智慧は廣大にして深遠なものである。眞諦といはず、俗諦といはず、すべての諸法に於いて、一佛たりとも覺りたまはぬことはない。この智慧を稱して佛寶といふのである。

諸佛の智慧に、先天的のもの、後天的のもの、ともに合はせて、不可思議、不可稱、不可量の功德を湛へて居らせらるゝ。この功德は、切磋して得給ひたるものであるから眞實であつて、虚妄なるところは毫末もない。されば千萬年を経とも決して變易するものではない。故に之を法寶といふのである。法とは實體の義である、不變易の義である。右の功德が、一々融和して、乖角することなく、違諍することなきを僧寶といふのである。

右の同體の三寶は、専ら佛に就いての解釋であるが、更に、吾々が先天的にこの同體の三寶を有する上に就いての説明をして見よう。

吾々の胸中には、常に煩惱なり、惡業なりの汚いものが充滿して居るけれども、無始以來、常に存在して變らない性徳といふものが、微妙な光を有つて潜んで居る。之を佛寶といふのである。龍猛菩薩の菩提心論に

『一切衆生本有薩埵。』

とあるは、まさにこの佛寶のことを説明されたのである。

この微妙なる心性の上に具足してゐる功德を法寶といふのである。

其の功德一々の法が和融して、何等阻害されて居ないのを僧寶といふのである。

別體の三寶

三世十方の諸佛の功德は、無量である。無邊である。凡夫では知ることが出来ないけれども、之を總括して、智徳、斷徳、恩徳の三つに區別することが出来る。智徳とは、

數かぎりもない一切の法を掌中の物を見るが如くにして、一塵も一點も、洩らさず、誤らざり居らせらるゝのをいふのである。斷徳とは諸佛が一切の無明を滅ぼして智徳を得させらるゝのをいふ。恩徳とは、諸佛が百福莊嚴の大悲の御手によつて衆生を救ひあそばさるゝのをいふのである。

住持の三寶

佛の木像や繪畫等を指して佛寶といひ、經文等を法寶といひ、經文を説いて人を導く僧を僧寶といふ。

これから語らうとするところは、専らこの住持の三寶に就いていふのである。

住持三寶の實證

佛教は、木像、繪畫の崇拜教などと、基督教徒達は誹謗して居るけれども、これは

是れ、たゞ外見ばかりによつて言ふことで、深く佛教の道理を攻究した上から言ふのではないから、全然門外漢の見當違ひの觀察たるに過ぎないのである。この事を解決する爲に、少しく専門的研究に這入つて行きたい。

佛教には、大乘、小乗の別があつて、其の大乘の中には、更に三乗と一乗との別がある。さて小乗の方では、木像、繪畫等には功德の有るのを認めて居ない。即ちこの木像なり、繪畫なりに現はれて來た佛に對しては、大恩を受けて居るからといふので木像、繪畫等を祭るけれども、其の主義としては木像繪畫等は崇拜して居ないのである。

大乘の三乗の方では、其の木像、繪畫等には、何等の功德をも認めないが、たゞ信仰する上に就いての對象として、粗末にしてはならぬといふことにして居る。しかるに一乗の方になると、木像、繪畫等は、いはゆる木像、繪畫に非ずして、其の木像繪畫等は眞正の佛であるとして居る。それが木像と見え、繪畫と見えるのは、凡夫の迷の眼を以て見るからである。論歩を進めて行けば、吾々の此の身體は何等の原質によつて出來て來

たか、地水火風空識の六大の集合に外ならぬ。豈に特り身體のみならんや、宇宙萬有は皆盡く此の六大の集合に依つて出来たものである。さうして、やがてこれ法身如來である。されば、佛と六大によつて出来たものなれば、吾々も六大に依つて出来たものだ佛と吾々とに何等變つたことはないのである。

今木像なり。繪畫なりは、彫工畫工によつて出来たものであるが、矢張其の原質は六外なるから、其の木像なり、繪畫なりも、いはゆる木像繪畫に非ずして、眞正の佛に外ならないのである。木像繪畫が生きたる活用を現はしたことは幾干もある。祖師等が妄語せらるゝといふ道理はないから、其の祖師等が申されたことを證據に引いて見る。今出川の淨華院の向阿上人は、三部の假名鈔を書かれたが、其の中に出て居る話である。九品寺の淨業衆に唯蓮と云ふ尼僧があつた。攝取不捨と仰せらるゝが、どういふ風にして攝取不捨をなさるものか、どうかその御有様を御告げくださいませと、雲居寺の阿彌陀如來のおん像に祈誓を籠めた。唯蓮は或る夜、うとくと眠氣を催した。する

と、夢か現か唯蓮とと呼ぶ聲有り、思はず眼を覺まして眺むれば、須彌壇上の如來、光耀赫奕として現はれ、蓮華座を離れて、唯蓮の傍へ來たまひ、親しく唯蓮の手を取つて、唯蓮よ、攝取不捨とはこの事なるぞと仰せられたと載せてある。

又東山の禪林寺の阿彌陀如來はお首が曲つて居らせらるゝ。永觀律師の禮讚の廻り方が遅いと阿彌陀がお首を曲げさせられて御注意なされたが爲でなると言ひ傳へて居る。

又京都東山の國阿堂の阿彌陀は笑つて口を開いて居らせらるゝ、國阿上人は空也派であるから空也踊をせられたのを、これを見て面白いとて笑はれたが爲であると言ひ傳へて居る。

恁様に木像でも生きた活用のあるのだけれども、凡夫の吾等の眼には、迷ひがあるので、之を明かに見ることは出来ないのである。尤も法寶にしても、僧寶にしても眞正の活用があるのだから、木像繪畫に眞正の活用の無いとは言はれない。これが即ち住持の三寶である。今日の衆生は、この住持の三寶に依つて救はれるのである。

國體を知らぬ愚論

されば吾々日本人民は、此の三寶に依つて徳を修め、君には忠、親には孝の人道を體得しなればならないのである。さうしななければならぬことは、已に聖徳太子が、其の十七ヶ條の憲法の中にちやんと規定しておかれた。太子の十七ヶ條の憲法は、隆々として今日に至るも其の光を放ち、尙ほ千載の後に至るとも、其の精神の眞髓は、長く日本國民の腦底に浸み込んで、其の興亡は日本國民と終始すべき筈である。

佛教は日本の國教にあらず、國教といふことを、朝廷より宣明せられたことがない等と言ふものがあるやうだが、これは日本の國體を知らぬ愚論といはねばならぬ。佛教は國教と否とに拘らず、佛教が日本に渡來以來、上は主上より下は細民に至るまで曾て之を捧持せざることなく、宗教といへば、佛教一つしかなかつたのだ。即ち宗教といへば佛教といふことになつて居たのであり、且つ佛教に依つて修養して來たのであるから、

國教と宣明せられずとも、まさしく國教に違ないのである。

西洋かぶれ

この佛教が、日本人民の精神修養に資した力は莫大なものである。しかるに維新後になつて、西洋の文明が這入つて來て、物質のことを八釜しくいふやうになり、精神修養のことも、つれて萎靡として振はざるやうになつて來た。兎角日本國民はかぶれるといふことに特長を有つてゐる。この特長は、決して喜ぶべきものでないのである。遂に西洋文明即ち物質的文明にかぶれて了つた。上流に立つて、國民を教導する身分の人からかぶれるのだから、理に闇き者が、何事も、これに見倣ふに至るは已むを得ざること、いはねばならぬ。

先頃のことであつた。帝大の山上御殿で井伊直弼公の遺品展覽會があつた。其の時、私も招待されて列席したが、新進の帝大教授の某といふ人が、新聞の號外を持つて來て

私の傍の腰掛け、獨逸はえらい、五隻の軍艦を撃沈した。實に勇猛な働き振だと一生懸命に稱揚した。これがかぶれてるといふのである。西洋かぶれも、こゝに至れば極端といはねばならぬ。獨逸は、左様に勇猛にしてえらからうが、之を稱揚するとは何事であるか。獨逸は御國の怨敵ではないか。

支那かぶれ

徳川時代には、儒教が偉大な力を以て精神修養を助けた。其の功は、決して没す可からざるものであるが、これが又其の極端に達して日本國民の精神をして、妙な危殆な地に導き入れやうとした。彼の京都の碩學山崎闇齋が、門弟に向つて、若し、孔子が大將となり、孟子が裨將となつて、旗鼓堂々として我國に攻め寄せて來ならば、諸子は如何とするかと問うたのに、門弟は、黙して一言をも答ふことが出來なかつたといふ。これがいはゆる支那かぶれ、儒教かぶれである。

林道春が自らが支那の冠服をつけた圖を描かせた。それから、荻生惣右衛門は、物茂卿などと、純然たる支那流の名前をつけて、文章を綴りても、日本國を、自ら東夷などと卑しめて書いた。大變なかぶれ方である。そもゝこのかぶれるといふことは、こちらのかぶれるのも無論悪いけれども、其の物がかぶれさせる力を有つてゐるからである。

同化する力

西洋文明も其の通り、見事に日本國民をかぶれさせて居る。しからは我が佛敎はどうであるか、かぶれさせる力を有つて居るや否や。

かぶれさせる力は有つて居ないではないが、佛敎自ら彼れに同化する力がある。同化する力と、同化させる力とは相違のあることを忘れてはならぬ。自らの柔かきを以て、他をも柔かくする。これ同化させる力である。他の柔かき中へ自らも這入つて柔かくなる、これ同化する力である。佛敎はこの同化する力を有つて居るのである。

佛教にも、世上の當然の理に洩れず、矢張り盛衰を繰返した。けれども、未だ佛教が日本國民をかぶれさせたといふことを見ない。佛教それ自身が同化したことは隨所に之を認めることが出来る、之が佛教の特色たる所である。

佛教は、印度から、支那に渡りて支那に同化し、支那から日本に渡つて日本に同化した。されば佛教は、支那から日本に渡つては、日本に同化して、佛教その物が第二の天性を作つたといふことが出来る。こゝに於てか、我國の佛教は、印度の佛教にもあらず支那の佛教にもあらず、純然として我國の佛教となつて了つたのである。

その佛教が日本に同化したといふ簡單な實例を一二列挙して試よう。

數種の實例

第一僧侶の服、即ち袈裟衣が、日本に渡つてからは、皆日本流となつて了つた。日本の僧侶の袈裟衣は、束帶の服装から脱化して來たのである。印度暹羅の僧侶が、日本の

僧侶の服装を見て、日本のいはゆる佛教は、或は眞正の佛教ではあるまいとか云つたといふことすら聞いて居る。

それから、日本では神佛に隔てをつけなかつた。尤も印度にても、已に本地垂迹の説のあつたことは、今日經文の上に窺知することが出来るのであるけれども、日本の奈良朝以降の盛に、即ち赤裸々に、具體的に之を稱道したことは、蓋し日本特有の佛教ではあるまいか。其の餘燼は未だ全く銷せず、維新前までも、僧侶が祭典を執行したことがあつた。

また、酒を飲むといふことは、佛教には、非常な破戒をしたといふことになつて居るが、日本では、必ずしも、其の戒を守らなければならぬといふことは無かつた。といふものは、宮中から御呼出のことがあつて、天顏に咫尺して御神酒を頂戴することがあつたから、御辭退申すも畏れ多いので、ありがたく頂戴したものである。

佛敎は道德の根據

これ等ことごとく、佛敎が日本に渡つては純日本式の宗敎になつたといふことを明かに證明することが出来るのである。さうして所謂日本の佛敎は、由來千有餘年間、日本人民の精神に、うるはしい修養を吹入れ來つたので、其の實體に於いては掩ふべからざる所の國敎となつたのである。しかるに、維新となつてからは、北方文明が、澎湃たる勢を以て流れ來り、何事も物質本位とすることを尊んだから、精神修養、即ち精神的文明を進めて來た佛敎は、忽ちに聲を潜めて、一隅に沈淪しなければならなくなつた。しかしながら、これは甚だしく顛倒したことで、このまゝにて進み行かば、やがては日本固有の日本魂も、極めて薄弱な、極めて稀薄なものとなりはすまいかとの心配を有識間に抱かせることになつたのである。抑も西洋文明の、何物であるか、何に因つて進歩して來たか、其の結果はどうか、其の土地風俗は日本と同じきか否かを研究しなかつ

た弊害であつて、少しく冷やかに考慮を費したならば、何人にも思半ばに過ぎることが出来るのである。

今日では、たゞ物質文明のみでは、國民の固有の精神を没却して行くといふことを知り出したので、國民教育は、須く精神修養を鼓吹すべき道德を説かなければならぬといふことに一致して來たやうであるが、さて其の道德を説くには、何れに根據を定めて歩武を進めて行けば宜いか。教育社界でも、まだ其の主張が區々であつて、とんと一致しないのは、甚だ憂慮に堪へないことである。

道德を説くには、何を云つても、根據を宗敎に取らなければならぬと吾々は思ふのである。宗敎といへども、神敎もあれば、儒敎もあり、キリスト敎もあり、佛敎もあり、其の他雑多な異敎もある。そして、各自、其の自ら信ずる所に據つて、我田引水説を吐いて居るけれども、吾國の歴史に鑑み、吾國民の抱持して來た日本魂の素質に鑑み、吾々は、どうしても我が佛敎に據るのが、最もこの要求を満足させるに遺漏なきものと

思ふのである。また、誤解して、左様しないでも、當然の理窟として、早晚は、左様ならなければならぬ好運命を有つて居るのである。

佛教は、老嫗稚幼に慰安を與ふる迷信的のものであつて、修養に資するものではないと思つて居る品がある。佛教は、死ななが爲めの宗教にあらずして、生きんが爲めの宗教であることを忘れてはならぬのである。

忠孝は理窟にあらず

此の佛教によつて、忠孝の念を鼓吹するは、殊に目下の急務であらうと思ふ。元來精神修養といふものは、理窟で解釋するといふものではない。宗教に依つて、之を不知不識の間に吹込んで、堅い根柢を培養すべきものである。宗教の一科を設けて學生を薰陶すべきやうにしたいものである。この、忠孝は理窟では解釋することが出来ぬといふことに付いて、趣味ある實話を思出した。

越後の寺泊の小學校に宮林裕といふ人があつた。私は此人と懇親の間柄であつた。此人から聞いた話である。

學校に『忠孝』の額が掛けてある。この忠孝の二字を、勅語の『克く忠に克く孝に』を引證して生徒に説いたが、生徒の中に貧人の子があつて、それが、『私は父母に孝行する必要がない』と言つた。以ての外の暴言である。しかしこれには、何か仔細ぞあらんと思ひ、何故に、かやうな心得違の言を吐くかと詰責すると、彼は縷々として、これに對して其の理を並べた。彼の兩親は、貧なる故に、彼を生んでも、彼を育つるだけの資力が無かつた。彼を路傍に捨てた。それで、某といふものが、不憫がつて、彼を引取つて養育した。彼が八歳になつた時に、彼の眞の父母が知れた。それで彼は眞の父母の手に引渡された。固より貧家であるから、彼の授業料は愚か、日用の文房具なども買つて與へることが出来ない。それで、町で彼の授業料は支辨し、彼の文房具は、彼が學校を了つてから、自ら玉子を賣り歩いて得た儲けに依つて買つて居る。彼が兩親に

孝行をつくす必要の無いといつたのは、こゝである。この誤つた思想は、理窟では、どうしても解釋することは出来ぬ。實に困つたものであると、校長は嘆息を洩した。

理窟で説かうといふのは、物質文明の特色であるかも知れないが、其の弊害は、延いて計り知るべからざるに至るのである。こゝに於てか、宗教の必要が生じて来るのだ。

君、君たらずといへども、臣、臣たらずべからず。親、親たらずといへども、子、子たらずべからず底の、うるはしい情は、何としても理窟では説けぬ。偏しては弊害があるけれども、將來は、宗教、即ち國教たるべき佛教と教育とは、相提携して進んで行かなければならぬと思ふ。

忍の養成

生忍と法忍と

忍の徳の、人生に一日も缺くべからざることはいふまでもない。人が此の社會に處して行くに、忍の徳が一大必要條件であることは、已に此の社會なるもの、性質が、必然的に之を語つて居る。即ち、社會、換言すれば世の中となるが、この世の中を一名娑婆世界といふ。娑婆とは印度の言葉で、之を唐譯すれば『耐忍』といふことになる。して見れば、この世の中に、已に耐忍といふ名前が付いて居る上は、一日として忍の徳を守らなければ日を過しては行けない筈である。

さて、忍といふ字は、忍辱と續いて熟語になるが、其の『辱』とは、どういふ意味の字か。辱とは、人が己を恥しめることである。すなはち恥辱をいふのである。それで、忍辱といへば、其の己に恥辱を與へたるを堪忍するといふことになる。けれども、佛教

では、この忍を二つに區別て居る。其の二つとは、生忍と法忍とである。

人が己に恥辱を與へる。それをじつと堪忍するのを生忍といひ、寒熱風雨飢渴老病等非常の者が來つて己を苦める。それをじつと堪忍するのを法忍といふのである。

堪忍するほど馬鹿々々しいことはない。手取早く復讐して、積れる鬱憤を晴して霽々とした方が宜いといふやうに思つてゐる、人が多いやうであるけれども、それは一時の心得違で、其の結果は、却つて終生の煩悶を來すべきことになる。いくら文明になつて物質的傾向が激しくなつたとて、この忍の徳を離れては、一日として氣を休ませて居るとは出來ないのである。

富樓那尊者の忍

釋尊が御在世のことであつた。御弟子の富樓那尊者は、阿羅漢の悟を開かれたから、本國へ歸つて、村人等を教へようと思ひ、釋尊に其の所以を言つて御別れを告げられた。

すると釋尊が曰はるゝやうには、おん身の本國には惡人ばらが多く跋扈つて居るといふことを聞いて居る。おん身は、其の惡人ばらをどうして感化して往かうとさるゝかと問はせられた。尊者は、拙者は、一に忍の道を守つて往きます。惡人どもが、もし拙者に向つて惡口を言ひかけて恥辱を與へたならば、拙者は、まだ一、拳を以て打たれないから幸福だと心得ませう。若し又惡人どもが來つて拳を以て拙者を打つたならば、拙者は、まだ一、杖で打たれないから宜いと欣びませう。若し又惡人どもが來つて、拙者を杖で以て打つたならば、拙者は、まだ一、刀で切られたのでないから幸福だと心得ませう。若し又惡人共が來つて、拙者を殺さうとしたならば、拙者は、早くこの五蘊聚集の毒身を離るゝことが出来る幸福を得ることゝ心得ませうといはれた。これだけまでに大悟徹底することが出来ればよいけれども、凡夫には、とても及び到らぬ境地である。

空也上人の忍

空也上人は、

「忍辱の衣厚ければ、林木瓦石は痛めず、慈悲の室深ければ、誹謗罵言は聞かず。若し人怒つて打たざれば、何を以てか忍辱を行ぜん。瞋つて我を打つは知識なり、彼の瞋るは我忍なる故。」

といはれたことがある。これは、堪忍すべき対象物の來らんことを待たれたのである。この対象物が來つて我を誹謗罵言し、我を打撲しなければ、我の堪忍の修業は積めぬといはれたのは、實に捨てがたい金言である。今の世の人、これだけまでの悟りは開けなからうが、せめて、其の心得だけでも持つて居てもらひたいのである。大日經にも

「於下背恩徳有情類上常行忍辱正觀過」

と説かせられてある。即ち、恩に報ゆるに仇を以てするやうな惡人どもに出逢つても、彼等は、無明の酒に酔はされ、煩惱の鬼に憑かれて居るが爲の此の所作ぢや、むしろ不憫な者であると一層に憫然の情を起してやるべきである。尙ほ、彼の惡人等が、吾に向

つて恥辱を與へるから、吾は忍辱の修業が出来るのである。吾の師である。吾の恩人であると思返されたのである。これを怒つて復讐するのは、師に背くといふことになり、恩に背くといふことになるのである。

社會のすべての事業でさへ、この忍の一字を守らなかつたならば、必ず成功することはないのだ。事業に失敗する者の多いのは、此の忍の一字の缺けたるに由り、成功するものは、この忍の一字が始終付き纏つてゐたからである。社會の事業でさへかくの如きであるから、況んや、人の上に立つて、人を教導して、人に精神修養を吹き込むことを責務として居る宗教家に於いておやである。

忍は法性也

遺教經に、釋尊は、

「忍爲徳持戒苦行所不能及」

と御説きなされて居る。何と、忍の徳功の弘大無邊なるかを見よ。一體この忍なるものは、敢て人間ばかりの所有物とはなつてゐない。森羅万象が、法性として、ことごとくこれを所有して居るのである。三芳野の春の花は、雨に叩かれ、風に打たれても、決して恨むやうな色なく、石山の秋の月は、浮雲が時々其の前を往來しても、憤るらしいやうな様をしない。さるに、萬物の靈長たる吾々が、どうして一刻として、この忍の一字から離るゝことが出来やうや。

西行法師の忍

藤原の憲清が世を厭ひ、出家して諸國行脚に出掛けやうと志ざした砌、平生より親しく仕へて居つた松川織部といへる家來、年來の主従の情すてがたく、ともに出家入道して隨從したきことをいふので、憲清も否みがたく、それより相伴うて西山の麓へゆき、勝持寺の上人を戒師とたのみ、二人とも出家した法名を、憲清は圓位、織部は西住と改

めた圓位は即ち西行法師のことである。

それより兩人打ちつれだち、諸國を經廻り、神社佛閣を拜し、名所古跡をも一々之を訪ねた、ゆきゆく遠江の國へ來た。遠江には天龍川の渡がある、丁度今船頭が纜を解かうとする時であつた。二人は喜んで其の船に乗つた。大勢の乗合である。中に一人の武士が乗合して居た。この大勢で乗出したら、向うへつくまでに、或は顛覆せんとも限らぬと心配して、彼の坊主奴、出ろくと武士は高らかに罵つた、しかるに西行は恚ういふことは渡船場の常であらうと考へ、何知らぬ顔で乗つて居ると、彼の武士は、がまんが仕切れず、西行の處へ來て、無禮なる奴め、武士の言ふことを何故聞かぬ。此奴恚うして呉れるわと、西行の頭を碎けよとばかりに續げざまに打つた。遂に鮮血は流れて、墨染の衣は、痛ましや朱に染まつたのである。これを見て居た西住坊、自分も前を洗へば、憲清に仕へた一個堂々の武士である。こんなさんびんに劣を取るやうな腕前ぢやない。己れ、どうしてやるかとすつくと立つて、今や彼の武士を打たうと

氣色ばんだ。西行は、大に驚いて、すかしつ、なだめつして、漸く之を止め、かくて武士に詫をいうて船を出たのである。

さて、西行は、西住に向ひ、釋尊因位の御修業中には、一切衆生の爲めに、芥子ばかりの所にまでも身を捨てたまはぬ所はなかつたといふことを聞いて居る。然るに、これ程の小事にがまんが出来ないやうでは、逆も出家の道を守つて行くことは出来ないであらうといつて西住を追還されたといふことだ、出家たらんものは、誰人でも、この西行法師の心得が無くてはならぬのである。殊に現代のやうに、すべてが輕薄になつて來ては宗教を以て社會人心に裨益すべき責務を有つて居る宗教家、道德家は、さらに一入この忍の徳を涵養することを怠つてはならぬのである。

疑はしき仁術

一は進歩一は退歩

精神の頽廢、看來れば、今日より甚だしきは無いと思ふ。蓋し物の進歩といふ者は、伴連でなければならぬ。又伴連であればこそ、長速の進歩をもするのである。伴連で行くべき性質のものが、一はかけ離れた進歩をするに、一は其のまゝの状態を保ち得るならばまだしも、却つて退歩して行くやうな道理は萬も無い筈であるのに、しかるに、これが尤も顯著な形を以て、日に月に、其の度合を高めて目に映つて來るのは、如何にも概かほしい次第である。それは何であるか。物質的文明と精神的文明とが、常に背馳して、一は進歩し、一は退歩して行くことである。

今日の状態の如く、物質的文明が、かやうに、自分の進歩するのと反比例に、精神的

文明を退歩せしめて行くやうでは、物質的文明ほど、精神界に荼毒を流すものは無からうかと思はるゝのである。

精神界の一大敵國

人間には、智と技といふものがある。智と技とを以て、自己以外の物に接する場合には、何物にも恐るゝことは無い。

獅子や、虎は、随分に恐ろしい猛獸である。けれども、人間は、之に當るに智と技とを以てするから、之を殺したり、之を生擒つたりすることが出来る。或は不幸にして、此れ等猛獸に噛み殺される場合がある。けれどもそれは形骸だけを噛み殺すに止まつて靈魂までは、如何ともすることが出来ないのである。

黒鼠病、虎刺病等は、随分に恐ろしい病氣であるけれども、人間は、之に當るに智と技とを以てするから、之を退治することが出来る。或は不幸にして、此れ等病氣に瘡される場合がある。けれども、それは形骸だけを瘡すに止まつて、靈魂までは如何ともすることが出来ないのである。

して見ると、人間からは、外界の何者にも恐るべきものはないのであるが、然るに近來になつては、ますます其の勢を猛くして、吾等人間に刃迎うて來る一大敵國が現はれて來たのである。何であるか。物質的文明である。この物質的文明が、精神的文明に仇することは一通りでない。しかしながら、能く討査して見れば、必ずしも、物質的文明なるもの、性質が、しかく精神的文明を退歩せしむるとは限つて居ない。たゞ之に宗教の信仰さへ伴つて行けば、却つて精神的文明にも光輝を添へるやうなことになるのである。我田引水説を述べたやうだが、凡そ宗教の伴はざる物質的文明ほど恐るべきものはないのである。又悲惨を演出するものも無いのである。吾々は、この痛ましい現象の中にも、最も醫師の現狀を見て、慨嘆に堪へないのである。

醫者と和尚

維新前は、醫は仁術と云ひて、上は陛下の典藥の正より、下は田舎の救醫者にいたる迄患者を憫むことを本懐として居つた。されば、ずつと品位を保つて、高尚に構へて居たものであつた。現今のやうに、診察料、往診料の値段を定めて、患者の詰所に張り出したり、人を遣つて藥價を督促せしむること、ちやうど普通商品の掛代金を取りに遣るやうなことをしたり、乃至は、藥價現金主義を取つたりしたといふことは斷じて行はなかつた。故に世間からも、それだけ醫者に對して尊敬を拂つて居た。又患者の方でも、此は診察料である、此は往診料であると云つて、商品代を商店へ拂ふやうな眞似は、曾てしなかつた。器量相應に紙に包んで、御禮として、恭しく呈したものであつた。

且つ維新前の醫師は、惣じて漢學を修め、相當の道を學んで、醫術を施す傍ら、仁義道德の道を説いて人に教へて居つたものだ。故に先生と崇められ、旦那様と稱せられて社會の上流に地位を占めたものだ。それで若し一朝、一家或は一村落に爭論などが勃發するやうなことがあると、其の仲裁及び捌きを付けて貰ふべく、和尚か醫師に走つたのである。和尚か醫師か出れば、必ず鎮定して了ふ。醫師にして其の徳を和尚に比せられて、同格までに崇めらるといふのは、何故であるか。仁義道德を以て、之を直ちに自分の營む醫術に應用するからである。

富豪だから、夜半でも往診するの、貧乏だから、閑散の日でも用事を構へて往診しないのといふやうな、不徳なことは毫も爲なかつた。否、少くとも社會に名を知られて居た醫師は、己れの身分の高きをも忘れて、初めての貧家にでも往診し、藥價は申受けぬ。診察してやる。遠慮なく澤山に飲んで、早く全癒するやうに致せ。重つて来るやうだつたら直ぐに通知して來い。いつでも來てやる。もう親舟に乗つたやうな氣になつて安心したがよからう。など云つて、時には、却つて醫師の方から、滋養品などを贈り與へたものであつた。

又頗る高價な藥品でも、惜むことなく無料で吞まし、そして、富豪に兩度往診すれば貧家には三度も四度も往診して患者を慰撫してやる、冷かな觀察をすれば、左様な反比例的の行動をするのは、要するに、名望を博しようとする手段に外ならぬといふことになるかも知れないが、決して、左様な立場から出る行動ではなく、其の仁義道德が根柢となつて、其の仁義道德が自發的に發露して來たものであることは、疑ふ餘地が無いのである。

されば、一概にもいはれぬことだが、病人の全癒するのを無上の快樂とし、更に自家の經濟の事なんかは、之を顧みるに違が無かつた位であつた。それ故、貧困の患者にして病氣が全癒すると、命の親だと知つて、生涯主家に對するやうな觀念を持ち、四季折の野菜を贈呈したり、或は勞働を以て之に報うたりしたものである。

千金方の至言

かくの如く、何れも仁術といふことを忘れなかつた。『醫者意也』と解釋して、意を以て其の病源を明かにして治術を施すべき苦難のに、『醫は衣也』と變じて、美服を着飾つて患者に衒ふものすらある。あゝ、現代の醫には、仁術を望むことは出來ぬ。支那人の書いた『千金方』といふ書に、

凡大醫治病必當下安心定志。無欲無求。先發大慈悲心。不問貴賤貧富。視為一筆。皆如其親。亦見彼苦惱。若己有之。深知悽愴。勿避嶮嶮晴夜寒暑渴飢疲勞。一心赴救。如此可謂下慈憫蒼生大醫上反之。則是含靈巨賊。

とあるが、これが、實に維新前の醫師の真髓であつた。維新以後の今日となつてはどうであるか。『仁術也』といふことは、或る一派の間は口には稱せられて居るけれども矢張實を擧げて居ない。いづれも純商賣的になつて來た困窮して居る者が重病に罹れば、到底回春の見込はつかないのである。醫師の診斷を受け、醫藥を連服すれば全癒するものが、貧なるが爲に、醫師にかゝることも出來ないで死んで了ふ。頻々として博

士學士の輩出する當今の文明を見て居りながら、かういふ悲惨な結果を見なければならぬとは如何なる不幸事であらうか。文明なのやら、野蠻なのやら、とんと鑑別のつかないことでは無いか。

商賣的になつたから、患者も之に對するに、恰も商店の主人に對するやうな觀念を有つて來た。それで今の社界からは、醫師は少しの尊敬をも拂はれないやうになつた。遂には、藥價が高いとか、診察料を割引してもらひたいとかいふやうなことを患者からも云ひ出すやうになつて來た。何といふ淺猿しいことか。

四海皆同胞である。同胞であるべきに、貧民にして、金が無ければ同情は買ふことが出來ぬ。たま〜治療病院なるものが設けられてはあるけれども、これとて患者に對しては決して完備したものとはいふことが出來ないのである。こと々々の貧民患者に治療するだけの收容力がない。且つ、其の醫師が患者に對する待遇は甚だ冷酷だ、自分は相當の月給を貰つて居るのではないか。自分が自腹を斬つて居るわけでもないのではな

いか。それに貧民に對してつらくあたるといふのは、そも〜同情心が缺けて居るからである。

同情心を呼び起し、向上せしむるには、宗教の信仰が伴はなければならぬ。宗教の信仰は敢て、醫師のみに限らず、すべての精神的文明を進歩せしめて、世道人心を麗しくして行くべきものである。

富者の萬燈、貧者の一燈

守銭奴に人情無し

乞食非人が、大寒中糲糲を身に纏ひ、饑餓に迫りて、泣々軒下に立つて、烈風に身を振はせながら、どうか一碗の御恵みをと乞うても、鏝一文すら施さぬものがある。これを稱して吝嗇といふ。

しかも吝嗇家は、自己の吝嗇を被ひ、隠さんが爲に、勝手の宜い理窟を云つて居る。

——貧乏人になり、乞食になるのは、みんな財寶を亂費し、怠惰に皆が耽り業をはげまなかつた罰が報うて来たのである。彼等をして、昔の眞人間に復らしめるには、彼等を救うてはならぬ。彼等を救ふのは、ますく彼等を不測の淵に陥れて了ふものである——と。成程一應は尤とも千萬なる説であるけれども、責むべき時に責めないで、責む

可からざる時に責むるのは宜しくない。さういふやうな理窟をいふものに限つて、冷酷で、吝嗇である。これを、更に稱して、いはゆる守銭奴といふのである。

かやうな山椒太夫は、昔にもあつたが、文明の今日になつても、益々多く殖えて来たこれは、道德が頹廢して来たことを明かに證據立て、居る好適例であらうと思ふ。

天賦として、すべて人は、五常の道を備へて居る。この五常の道を備へて居る以上は慈悲や情といふものがなくてはならぬ。慈悲や情が有つたならば、たとへ自分は貧乏であつて施すことが出来ないまでも、せめて人の施すのを見て、隨喜贊成しなければならぬのを、自分は有福者でありながら、冷酷で、吝嗇であるのみか、他人が施すのを見て、却つて、之を妨害せんとまですることがある。自分の吝嗇が目立つて、人から弾斥を受けるのを避けようといふ心からしいが、十目の視る所、十手の指さす所、それ嚴なるかなで、ますく自分の惡徳を世間に發表することになつて了ふのである。

四海同胞

一體吝嗇といふことは、人間の眞理に背いて居る。一つの母から生れて来たものは、皆兄弟である。他人とならうと思つたつて、なられるものではない。それは眞理が許さぬからである。吾々五千萬の日本人民は、一つの日本の國土に生れて、一つの空気を吸うて、父母の子を愛する情と同じ情を以て大御心となし給ふ聖天子の徳政の下に住んで居るものであれば、どれもこれも兄弟である。四海同胞とはこのことだ。

兄弟であれば、たとへ怠惰であつたが故に、貧乏となつて苦しむとはいへ、よろしく之を救はなければならぬ。見せしめであるとか、爲にならぬとか云つて、顧みないわけには行かぬ。自分ひとり飽食暖衣して、兄弟の貧苦を顧みないものはまさに人道に脱れて居る。さうして、父母に對しては不孝の子になつて居る。貧苦に迫つてゐる兄弟を助けてやれば、其の父母はどれだけ喜ぶか。恚う語つて來ると、吝嗇といふこ

とは、父母に對しては不孝となり、君に對しては不忠となり、國家に對しては不信となる。其の罪や、決して輕々しいものではないのである。

吝嗇は無意義なり

殊に佛教の上からいふと、敢へて、君のみならず、敢へて父母のみならず、一切衆生即ち、禽獸山河草木に至るまで皆兄弟なのである。否、生々世々の父母兄弟なのである。其の父母兄弟たるべきものが、かやうに零落して貧苦に迫つて袖乞をするのに、袖手傍觀して、吾不關焉といつたやうな顔をして居ることは出来ない筈なのである。

まことに吝嗇は、法性の眞理に背いて居る。法性の眞理といふのは、無始の世から、森羅萬象を幻出して、一切衆生に供養して來て片時も休して居ないのである。一切衆生は、この供養を受けて、各々自分の位置に安んじて居る嵐山の櫻、立田の紅葉、石山寺の秋月、宇治の螢、風流の士に供養して居る、法性の眞理に隨つて運動するものは、皆

かやうに施すといふことをして居る。

今かりに吝嗇をして鉅萬の富を蓄へたとする、其の鉅萬はどうするつもりか、まさか死ぬる時に持つて行けるものでもなからう、相續者に放蕩息子があつたら、見る／＼中に蕩盡して了ふに違ひない、實に無意義極まることになる、さればとて、私は、社會主義者のやうなことをいふのではない、社會主義者の説は國家を亡ぼして、夢にも見ることの出来ぬ理想郷を造らうとするのだから、社會の秩序を紊亂させる、社會主義者風の思想に對する駁撃は別に論ずることにする。

それで、吝嗇によつて貯へた富は無意義である、且つ多くの場合、吝嗇に依つては金は得られないものである。大學に、『貨悖而入者亦悖而出』と云つてある通り、到底いつまでも其の富は保てないものである。されば、人道をわきまへ、貧苦の者には、或る程度までは施してやらなければならぬのだ。

なほ富者で無くとも、施すといふことを忘れてはならぬ、自分の身を削いでまでも施

せとはいはぬ。身分相應に施さねばならぬ。富者の萬燈は貧者の一燈といふことがあるが、其の心さへうるはしく、其のなさけさへやさしければ、其の施す上について多少を論ずべきではないのである。

忠なれば孝

佛教の渡來

我朝にては、佛敎は、欽明天皇の御宇に始めて渡來した。始めての渡來故、當時の朝議は沸騰し、遂に宮中にては、之を祀ることを禁ぜられた。それで、欽明天皇におかせられても、佛敎を御信仰あそばす御意嚮はお有り遊ばさなかつたやうに史家はいうて居るけれども、私は、天皇は、當時佛敎を御信仰遊ばさなかつたのではなく、むしろ深い御信仰の御念慮がお有り遊ばしたのだと、御斷言申上げるのである。

百濟國の聖明王が、佛像と經論を獻納した時に、當時の大臣達には、受ける、受けなないの二派が出来た、蘇我の大臣稻日宿禰は之を受けても宜いと主張したが、物部の大連尾輿、中臣連鎌子は、之を受けては宜くないと主張した、其の趣意は、日本は神の國で

ある。神の國である日本が、異國の邪敎を受けて祭れば、神の御腹立を招いて忽ちにして此の國土に災害を降したまふことになるといふのであつた。始めての渡來でもあり、且つは其の趣意に一理もあるので、御心中には御信仰の御念の御起りあそばしたにも拘はず、其の物部氏等の主張に同ぜられ、禁中に於いて御祭りになることはお止め遊ばされ、特に之を受けても宜いと主張した蘇我氏に賜はることになつた。蘇我氏は、伽藍を建て、祭り、己れひとり、頻に之を信仰した。すると折悪しくして、間もなく國中に疫病が流行した。物部氏は、得たり賢しとし、これは、たとへ臣下の一人のみであらうとも、彼の異敎の靈を奉ずるによつて、神のお腹立を受け、かやうな疫病を下されたのである。速かに擊退して神慮を安んずべきであると天皇に奏上した。天皇にも、之に抗ひ給ふだけの御理が當時に御見出し遊ばすことが出来なかつたと見え、餘儀なく善きに計らへといふ詔勅を下したまはることになつた。

物部氏等は、大舉して、蘇我氏に押寄せ、伽藍を焼いて了ひ、佛像までも取出して、

之を火にかけて鎔かさうとしたが、ブラチナ故に鎔けない。致方が無いから、遂に灘波の堀江に投じて了つた。これが善光寺如来の御本尊にならせられたことは何人も知つてゐる所である。

これで、右のやうな史實の上に現はれた丈では、欽明天皇には、たゞ、どちらへもつかず、否、どちらかといへば佛を退けたまふやうな御叡慮のあらせられたやうに拜察し奉らなければならぬのであるが、然るに、日本紀を繙いて見ると、其の翌年に天皇は、楠を以て三體の佛像を刻むやうにとの詔勅を下されたと出て居る。此間の御消息を拜察し奉れば、いかばかり、御心中では、其の當時にでも已に御信仰の御念のお起り遊ばされて居られたことかを拜察し奉るに充分なのである。

銘打たざるも國教なり

由來歴代の天皇、何れも佛敎を御信仰あそばされ、佛敎は年を追うて隆盛になつた。

何れの天皇に於かせられても、御仁徳の高くおはしましたことは申すも愚なことであるが、就中、佛敎を深く厚く御信仰あそばされた天皇は、更に御聰明におはしましたやうに拜察し奉ることが出来る。これは、どういふわけか。

そも、この國家は、誰の國家か。とりもなほさず陛下の國家である。陛下の國家である以上は、國家に生存して行く吾々國民はまさしく陛下の赤子である。即ち陛下は吾々國民の父なり、母なりにおはしますのである。されば、陛下の一舉一動は、陛下御自身のお爲ではなく、吾々國民の爲にとの御心遣であると拜察し奉らねばならぬ。

歴代の陛下が、深く厚く佛敎を御信仰遊ばされたのは、陛下御一人のお爲ではなく、まさしく吾々國民全體のお爲であつたに違ひない。佛敎が國教となつて居るのは、決して怪むべからざる事實ではないか。たとへ、佛敎を以て國教と銘をお打ちなさら無くつても事實が國教のやうになつてゐれば、之を國教と云つても決して差支はない。つまり事實が國教となつたのだから、改めて又國教と銘を打つの必要はないのであつた。

基督教などが、自分の宗教を國教にしようと思つて居るやうだけれど、日本の國體日本の歴史が之を許さぬ、といふわけは、宇内に赫灼として光輝を放つて居る日本魂なるものを分析して見れば、直ぐに其の然る所以が了解されるのである。

忠孝即日本魂

朝日に匂ふ山櫻花、日本にのみ在る日本魂。これは何ういふものから成立つて居るか。

明治天皇の下したまはつた、教育に關する勅語——私が之を教育勅語とは申上げず教育に關する勅語と申上げたのには、別に意味のあることである、その事は、更に語ることにする——の中に、『克く忠に克く孝に』と仰せられた。其の忠と孝とが、即ち日本魂である。この忠孝の二字は、其の行ふべき範圍が頗る廣い。道徳を修むる上に就いても、學問を進める上に就いても、政治を行ふ上に就いても、徹頭徹尾、この忠孝を

離れてはならぬ。凡そ忠孝を脱出した行爲は、何事に拘らず、眞面目では無い、誠意がない。害することこそあれ、利することは寸分も認めることは出来ないものである。

今、忠と云ひ、孝といふ。其の忠と云ひ、孝といふ二字は、日本にのみあつて、他國には無い。否、何れの國にも有る。殊に支那は、三千年の昔に於て孔子が口を酢ばくして説かれた。けれども、こゝに細心の注意を拂はなければならぬのは、其の唱導せられた忠孝の意味は、我が日本には之を應用することが出来ないものである。日本でのいはゆる忠孝は、とりもなほさず日本魂であるからだ。他國に、この日本魂の如きものがあるか。それが無い上は、日本の忠孝は他國の忠孝とは大に其の性質を異にしてゐることが了解し得らるゝであらう。しかして、この日本魂を今日の狀態にまで進めて來たのは何の力に依るか。私は、一に佛教の力だと云ひたい。

何とならば、釋迦一代の説かせられた經文は數かぎりもなく、宏大無邊であるけれども、其の要旨を縮め詰ると、たゞ忠孝の二字を説かせられたに過ぎないといふことに

なるのであるから。

佛教は、他にも特殊な教を數限りもなく説かれてあるけれども、之を概括すれば四恩の教となるのである。されば、この四恩は、まさしく佛教の大綱要といふことが出来る。四恩とは、一に父母の恩、二に國王の恩、三に衆生の恩、四に三寶の恩をいふのである。今便宜上、各恩の性質を説いて見る。

1 父母の恩

父あり、母ありてこそ、始めて吾身があるのである。身體髮膚之を父母に受け、敢て毀傷せざるは孝の始めなりと孔子も説かれたごとく、親の吾等に對する恩を思へば、些細なことにまでも注意を拂つて親に恩を返さねばならぬ。されば、無論父母に對する道は、何から何まで孝の範圍を脱出してはならぬ。釋尊は、梵網經の中に「孝順は至道の法なり」と説かせられた。經書の解釋は甚だ廣くはなはだむづかしいものだ、煎じ詰

めれば孝の一字になつてしまふのである。其の忠も、忠臣は孝子の門に出づとか云つて、親に孝なればこそ君にも忠なるのだから忠孝を更に約すれば、矢張孝の一字となつて了ふのである。

で、釋尊は、そも佛になられた始めに孝を説かれ、涅槃に入らせ給ふ時にも更に孝を細説された。始めも終りも汲々として孝を説かれたのであるから、其の中間に於いて説かせられたことに、孝の道より以外の道のあらう筈がない。父母の恩の至大なることは、之にても知るのである。なほ本章の後段の十恩及び別章の「父母の恩」の一章を參看する必要がある。

2 國王の恩

別章に、單獨に「國王の恩」の一章があるから、其の方で見てもらひたい。

3 衆生の恩

經文の理から説いてかゝれば、なか／＼むづかしいことであるが、要するに、同胞相親みて助け合ふといふことなのである。五千萬の日本人民は、同胞である。兄弟である。葬式があれば會葬に行く、隣に火事があれば見舞に行く。友達が病氣になれば見舞に行く、不時の災難にあへば慰問に行く、これ等は皆衆生の恩である。かくして國家は平穩安泰を保つのである。なほ詳細は、別章「相互の恩」の一章を見られよ。

4 三寶の恩

別章に、單獨に『三寶の恩』の一章があるから、其の方で見てもらひたい。

一 大孝經

如上の四恩が佛教の大綱要である上は、佛教は、たゞ忠孝の道を説かれたものだとはい得る。

一切衆生は、死にかはり、生きかはり、三界を恰も車の如く流轉して居る。之を六趣輪廻といふが、其の間には、お互に、親ともなり、子ともなつたであらう。此の故に、彼の梵網經の中に、人類動物の雄なるものを見たらば、之を父と思へ、雌なるものを見たらば、之を母と思へと説いてある。この一切衆生を救ふことを説かれた經文が法華經である。日蓮上人は、この法華經を一切經中の一大孝經だと曰はれた。

恙ういふやうな次第で、釋尊は、一生涯を通じて忠孝を説かれたが、其の説かれた忠孝なるものが、即ち我が國の忠孝を涵養したのである。我が國の忠孝は、即ち換言すれば日本魂といふことになるのである。されば我が國民をして、忠孝の念を厚くせしめ、延いて國家を安泰の地位におかしむべく導いて行くには、佛教に依るより外はないのである。

であるから、維新の當時、廢佛を實行しようとして政府當局者は苦心したけれども、日本魂と其の根據を同じうして居る佛教故に、一時的の打撃は被むらされても、遂に根本まで之を葬り去られるといふことはなかつた。今日となつても、政府當局者や、教育家は、なほ佛教は國教ではないといふやうなことを云つて居るらしいけれども、よし國教でないといふやうなことにきめられたところで、國教的の歴史を有ち、國教的の資格を有つて居るからには依然として國教たらざるを得ないのである。

忠孝は一體なり

忠孝の道について、已に縷々と言を費して來たが、私は、まだこの忠孝に就いて、歩武を進めて語りたいたのである。

さて、父母に孝なれば、君に忠、忠孝は一物の左右にして、且つ一物一體である。そして其の中にも、孝は忠を兼ねて居るから、孝さへすれば自然に忠となることは、

已に語つたが、孝の對象物である親の恩ほど弘大無邊なものはない。しかるに、この弘大無邊なる恩を、左様にも思はない傾向のあるのはどういふわけか、あまりに馴れすぎ、深く考へないである。

太陽の恩と父母の恩

日が暮れた、暗の夜となつた。提灯を借りたが爲めに、其の光りで安全に家に歸ることが出來た。翌日は、喜んで禮をいつて返しに行く。その、たゞ自分の行く道の行手を照した光だけにさへ感謝の念を湧かしながら、なぜ萬古不易に照して居る太陽に向つて感謝の念を刻々に拂はないのか。父母の恩は太陽の如くである、提灯の禮に行くものが、この父母の恩を忘れてなるものか。父母は、足の爪先より、脳天に至るまで、我子に就いては始終注意を拂つて愛護して居る。あまりに馴れすぎて、尊敬の念の薄らぐやうでは、子であつて、子にあらざることになる。禮を知り、恩を知る者は人間である。

鳥に反哺の孝あり、鳩に三枝の禮あり、乃至は、犬が禮を云つたとか、猫が恩を返したとかいふ話があるが、よし、それ等は禽獸の變性にしたところ、人間なるもの、此等に對して、甚だ忸怩たる感無きを得んやである。

父母に對しては、親しき中にも、高き尊敬を拂はなければならぬ。そして、一日たりとも、一刻たりとも、この孝の念を念頭から忘れてはならぬ。實に父母の恩は弘大なるものである。けれども弘大であるから孝を怠る勿れといつたのみでは捉ふる所が無い。故に釋尊は、涅槃經に於いて、其の恩を巨細に説かれた。人の子である以上、此の經文を一讀すれば、其の恩の弘大なる數々を知ることが出来て、涙の泣然として面に横はるるをも知らずに泣くことであらうと思ふ。

支那の某(著作不詳)が、この涅槃經の趣意を取つて、父母恩重經といふを書き、父母の十恩を擧げた。今一々之を擧げて略解することにした。

1 懐胎守護の恩

母が懐胎すれば、腹の中の子に不都合の出来ないやうにと、種々と氣を遣ふ。自分が好きなものでも、胎兒の爲にならぬものならば我慢して食べないことにする。電車や汽車や、母の身體を動搖させて胎兒に害を及ぼすやうなものには力めて乗らないやうにする。始終醫師や産婆にかつて、胎兒の健康を計る。又一方には、胎教といふことも心掛けて、懐胎中は、惡聲を聞かず、悪い行ひに近寄らないやうにする。そも、懐胎してより生るゝまで、胎兒は一日として、一刻として、母をして安堵の念を抱かしめることとはないのである。恚ういつて來ると、母一人の心配のやうだが、父といへども、一通の心配の仕方ではない。母が少しく氣分が悪ければ、母の身體を心配し、ついで胎兒に影響するやうなことはありはすまいかと心配する。健康な、そして立派な子供が生れてもらひたいと、父の心を痛めることも一通ではないのである。

2 臨産受苦の恩

母が産に臨んだ時は、まさに一生涯を通じての重大事件に遭遇した時である。もしも難産であつて、一步を誤るやうなことがあつたら、母の生命は無くなるのである。いはば生死の瀬戸際である。風前の燈である。父にしても、この母の痛苦を見て居て、此世に居ながら此世に居るやうな心持のしないほど心配をするのである。吾々は父母にこのやうな痛苦を掛けて生れて來たのである。

3 生子忘憂の恩

母は前陳の通の痛苦をして吾々を生んで呉れた。若し、かやうに生死の瀬戸際を往來するやうな苦勞を他に嘗めたことがあつたら、一刻たりとも、一生涯其の時のことを忘れず思ひ出すたびごとに、必ず戰慄する。それに此痛苦のみは、どのやうであつても、

吾を生んで了へば、けろりとして忘れて了ふ。母をして其の痛苦を忘れさせるところの、吾々に對する母の恩を思へば、まことに、難有さに涙も滴るゝ次第である。

4 回乾就溫の恩

寢具の中で大小便をする。寢具が濕ぼくなる。母は自ら其の濕ぼくなつた處へ寢て、赤子を乾いたところへ寢させる。これは吾子であればこそ出來るので、他人の子であつたらどうか、其の大小便は見るも汚なく思はれる。母は、これを汚ないとも思はず、自分其の濕ぼくなつたところへ寢るのである。

5 嘔苦吐甘の恩

拙苦いものを喰べて、甘い乳を出して吞ませて呉れることをいつたのである。約言すれば、赤子の爲めに乳を造らへて吞ませて呉れる恩を云つたのである。

6 乳哺養育の恩

乳を吞ませたり、それから二歳にもなれば、米飯などを喰べさせたりして呉れる。そして、一日も早く成人して呉れと引伸ばすやうにして呉れるのである。

7 洗濯不淨の恩

大小便で汚れた衣服や襦袢などを、別に汚ないとも思はず洗濯して呉れる。親なればこそだ 他人だつたらば、誰が恁麼ことをして呉れるものか。

爲子造惡業の恩

子の爲に、知りつゝ悪い事をする、吾子に立身出世をさせたいばかりに、人殺の大罪を犯した例さへ演劇等には能く見ることである、子故の闇といふ言語があるが、父母

は、吾子に對しては、非條理なことまでもするのである。此恩を立證するために、私には目連尊者の母の話が試みたい。

目連尊者が、まだ羅漢になれない先は、隣國にも鳴り響いた豪商の粹であつた。父が亡くなつたので、式の如く野邊の送りをすましたが、商人とあつて見れば、いつまでも嘆いて居るわけには行かぬ。業にいそしまなければならぬ。それで、他國へ商品を仕入れに行くことになつた。其の時、母に向つていはるゝには、亡父が造らへて下すつた財産があればこそ、私は今日、恁うやつて、何の差支も無く日を過し、且つ立派に商賣も行つて行けるのであります。されば、この財産を三分して、其の一分は、私が商品仕入の資本に持つて行きます。一分は、母上の御扶養料に致し、残りの一分は今祇園精舎において遊ばすお釋迦様の許へ差出して、亡父の菩提をとむらふ爲め盛大な供養をしていただくやう願ふことに致しませう。この事は、深く御依頼いたしますといはると、母も、二つ返事に、目連尊者のいはるゝことを承諾された。そこで目連尊者は安

堵の思をなして鹿島立をせらる。

しかるに目連尊者の母は、其の後にて思ふやう。商賣といふものは、必ず儲かるとは定つて居らぬ、どんな事で損害を招くかも知れぬ。其の時になつて資金が無くなつて居れば、嘸や忤が當惑することだらう。忤は彼様ことを言殘して旅立したけれども、これは、めつたなことをして、このやうな大金を亡父の供養に費つて了ふことは出来ぬと子を思ふ心から亡父の供養をしないことに定めた。

こちらでは目連尊者、色々の商品を仕入れ、年を越えてから歸つて來られる。目連尊者の方では、どんな鹽梅に亡父の供養は勤められたか、嘸かし盛大に行はれ、亡父の靈も彼の世で喜んで居らせらるゝことだらうと、始終其の事が腦裏にかゝつて居るので、國界を越すと、もう、其の邊の人に、去年には、盛大な供養があつた筈だが、どんな風に行はれたかと問はれる。これは財産の三分の一を擧げて行はれた盛大の供養だから、國の隅々までも鳴りひびいて居る筈だと思はれたから、かやうな、國境を這入つて來ら

れたばかりにても、已に尋ねて見られたのである。其の邊の人は一向に存じませぬと答へた。遠いから有繋に知らないものであらうと目連尊者も、まだ疑はずに道を急がれたが其の後、度々尋ねられたけれども、どこでも知らないと答へた。最後に村へ這入つてから入念に聞かれる、矢張知らないと答へた。不思議でたまらなかつたから、歸宅勿々母に向つて篤と其の實否を訂された。すると母は、間違ひなく供養致したと答へられたのである。恚ういふ偽、即ち悪業を作つてまでも、母は子の爲めを畫られたのであつた。

其の後、母は死なれた。目連尊者は、之を機として釋迦の御弟子となり、功積みて羅漢とまでにもなられた。羅漢は神通力を有つて居る。そこで尊者は、神通力を以て母の行衛を尋ね、十方世界を経廻つて見られると、思ひきや、母は、供養する金を慳んだ報によつて餓鬼道に落ちて居らるゝ。尊者は、泣き悲しみ、母を救上げんがために神通力を運んで見られたところが駄目であつた。法力を以てせられても駄目であつた。遂に釋迦の御前に行つて、事の次第を述べて、どう致せば母を救上げることが出来ませうか

どうかお力添をくださるやうにと依頼された。釋迦は、それは金を慳んだといふ原因に依つて餓鬼道に落さるゝといふ結果を得たのだから如何ともすることは出来ぬ。しかしたいこゝに一法がある。一夏九十日の間坐禪に籠つた衆僧が、八月の十五日には、其の坐禪を解いて、南に歸り、北に行く。この十五日に、その衆僧全體に向つて盛大なる供養を設けたならば、或はおん身の母は、悪業を脱して、天上界に生れるやうになるかも知れぬと仰せられた。目連尊者は喜んで釋迦の仰せの通りに運ばれた。すると、果せる哉。母を餓鬼道から救出することが出来たのである。この事蹟は孟蘭盆經といふに出て居て、そして、やがて孟蘭盆の起源となつて居る。

9 遠行憶念の恩

父母在す時は遠く遊ばず、行くに則ありと孔子も曰はれた通り、父母は吾子の遠くに在るのを憶うて、一日として安堵することは無いのである。この父母が憶念するところ

の恩を思へば、子たるものは、遠くへ離れて父母に心配をかけるといふやうなことはしないやうに心掛けねばならぬ。

私共兄弟阿兄と私との二人であつた。私の師匠は大和の長谷寺に居られたから十一歳の時から、私は一所に行つて居つた。家には阿兄が居つた。當今とは違つて、私の國から大和の初瀬まで行くには随分な日數を要したものであつた。それで手紙の遣取の如きすら、三年五年に一度位しか出来なかつた。一度故里へ歸つたことがあつた。母は大喜び、私が好きだからで、やれ素麵を茹でよとか、やれ餅を搗げよとか云つて大騒をしたものである。其の時、阿兄は私に向つて、去年、母は、なか／＼重い病氣をせられた。此の分では、特別な飛脚を立て、おん身を迎ひに行かなければならないかと心配したが、幸にして全快されて安堵した。其の病氣中、母は、おん身のことばかりを憶はれて、遠い國で、病氣でもして居やしないかと、自分の病氣して居らるゝのにも、氣が付かぬやうに、おん身のことばかりを云つて居られた。それが爲、却つて熱

が嵩じたこともあつたと當時の爲體を詳細に語つた。これが遠行憶念の恩である。私は今七十歳を超えた高齢になつて居るが、母の病氣を高めた位まで、母をして私の遠行を心配させたかと思ふごとに、いつも涙に誘はれながら、有難く感ずるのである。

10 究竟憐愍の恩

憐愍の情は誰でも多少はあるが、殊に父母が子に對する憐愍の上にも憐愍といふ風に及ぶだけ其の憐愍の情を究めてゐるのである。私の郷里の隣村、即ち越後三島郡西越村大字豊橋といふところに、山崎善太郎といふ財産も相當に有つた農家があつた。九十七八の老人であつたが、なほ鏗鏘として中老者を凌ぐ位であつた。末太郎といふ倅があつた。けれどもそれは病身者、始終家に居てふらふとして居つた、しかるに百歳に垂んとする老體の父は、毎日鋤鋤を持つて山畑へ出掛けて行くのである。私は或日のこと、其の老人に向つて、御老體の御身分で、どうして、左様に毎日山へ御出掛けにな

るのですかと訊ねた。意屈だからと答へる。意屈ならば山へ行かずとも、自家で仕事をなすつたらどうですかと更に突込んで聞いたら、倅が彼の通りの病身者故、せめて息のある中は手助になつてやらうと思ひましてと答へたのである。

それから又恚ういふ話もある。

以前奈良縣知事で、税所といふ方があつた。この方は骨董いぢりがすきで、遂に一代の中に、巨萬圓の金額に見積るだけの骨董品を蒐集した。これが大自慢で、畿内中には其の聲名を鳴らしてゐた。しかるに、此の方の倅が、どういふものか、非常な放蕩家であつた爲に、年來苦心して蒐集した骨董品も、ことごとく人手に渡るやうな始末になつた。或る日のこと、友人が訪れて話の序に、嘸かし御殘念のこととせうと思はると、税所氏は、なに、どうせ私は今に死んで行く身、死んで行けば、誰がどうして無くするか知れたことぢやない、子供が無くしたんだから、別に何とも思つて居ないと、案外平然たるものであつたといふ。

これ皆憐愍を究竟する父母の恩である。さて、十恩もこれで先づ説き終つた。四恩といひ、十恩といひ、之を要するに、皆忠孝の道を説いたものに過ぎないのである。日本魂を養成すべく説いたものに過ぎないのである。

佛教の真髓は忠孝であつて、忠孝は即ち日本魂である以上は、佛教は、日本の宗教として、今後ますます隆盛に赴く可きは當然の理であらうと思ふのである。

道 と 信

信の姿

佛教に『三寶に歸依する』といふ語がある。歸依とは、即ち『信ずる』といふことである。この『信ずる』の『信』の一字は、社會に處して行く一大寶箴である。信あれば人に對し、人より對せられ、相互に憤怒といふことも疑惑といふこともなくなり、至極圓滿に往くものである。信の力、信の働は、其の功の及ぼすところ極めて廣大にして有形無形に利を興ふことが莫大である。

信とは、之を譯すれば『まこと』である。まこととは、各自が其の本分を守つて、偽ることなく、私することなきをいふ。佛は、曾て、

『今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子』

と仰せられた。是れが即ち「信」の姿である。何とうるはしいものではないか。

父母は果して吾子に偽をいふか。即ち果して信ならざることをいふか。否、父母は吾子に偽は云はない。吾子に信ならざることは云はない。又父母は、吾子に向つては毛の先ほども、私を挟まないのである。又父母は、吾子に向つては、曾て不親切なことをしたことはないのである。

この、父母が吾子に向つて、偽をいはず、信ならざることをいはず、私を挟まざらず不親切なことをいはずの情を各自に持つて、互に相助け合ひ、互に睦み合つたらば何うであるか。道徳は大成せられて、社會は渾然たる一塊の道徳團になるのである。

練膽も技巧に止まるべし

恚う云つて來ると、中には、それはたゞ理想的なことをいふにとまりて、到底實現することの出来ない話である。且つ、實際さういふ風になつては、社會に活氣が乏しく

なつて、富衰へ、兵弱くなり、國家は累卵の危きが如くになつて了ふと云ふ人があるらしい。

これは以ての外の暴説で、之を換言すれば、道徳は宜しく振捨て、何でも物質的に行けといふのと少しの變りもないのである。物質文明の弊の恐るべきことは、已に口を酔ばくまでして語つたから、こゝにはいはないが、そんな暴説の下に、たゞ物質の文明に腐心し、兵力を増さんと漁り、富力を高めんと苦慮して居ると、終には、悲惨極まる結果を見るに至るは必つて居る。恚ういふやうな説を吐いて得々然たる人の精神修養のほどが疑はしい。否、曾て精神修養といふことには氣がついて居らぬので、其の自ら以てこれこそ眞の精神修養だと思つて居ることは、膽を練つたり、腕を磨いたり等することだが、それは、根を斬つて枝を繁からしめんとする間違で、甚だ精神修養の本義を没却して居るのである。且つ其の膽を練つたり、腕を磨いたり等することすらも、根柢となる眞の精神修養が無ければ、たゞ一種の技巧に止まつて、いざといふ場合、何等の實

用にもならないのである。剣道を修業して、天晴の達人となつた。強盗に逢はうが、猛獸に遭はうが、道理から押して、決して恐怖するやうなことは無いはずだ。それで居て夜道が獨では歩けぬ。化物が恐い。追刺が恐い。狐が恐い。狸が恐いといふ。恚ういふ弊は、今の撃劍家によくあることだ。精神の眞の修養が無ければ、其の技巧は何にもならない。されば、道徳を心掛けて、一舉一動、この範圍内を離れないやうに、脱線しないやうに力めなければならぬのである。道徳の上に立てば勇も眞の勇となり、義も眞の義となり、富も眞の富となり、國強く、兵強く、延いて皇威は八紘に赫灼として其の光輝を放つに至るのである。

國務大臣及び衆議員

さて其の道徳を修めるには、どうしたらばよいか。前にも云つて来た通り、「信」の一守を守らなければならぬのである。それで、今國家の政權を掌握するところの國務大

臣達が、『悉是吾子』といふ『信』を有つて天下に臨んだらばどうであるか。國民は此の國務大臣を見て、恰度稚子が其の父母を慕ふやうに渴仰するに違ひない。今日のやうに政黨と結托し、この政黨を利用し、時には、秕政と罵詈せられて居る政治をも敢へて施行して了ふことがある。そして國民が怨嗟の聲を放つのを聞いても、一向平氣の平三を構へて居る。下に向つて『信』がなければ、亦下も上に向つて『信』を捧げることが出来ないのである。

衆議員諸子が、もしこの『信』を用ゐて政治を議するといふことをしたらばどうであるか。善政立所に施かれ、福履は四海に流れて、國民は手の舞ひ、足の踏むのを忘れるに至るであらう。しかるに、黄白に垂涎し、議事を以て私腹を肥す材料となし、善きも悪きも、そんなことには頓と無頓着、自分の都合の宜い方に賛成して了ふ。衆議員に何の『信』があるか。國民も亦『信』を以て之を迎へることは出来ないのである。

田夫村娘にも信無かるべからず

なほ之を小さくして云つて見れば、農夫が田を耕したり、村娘が綿糸を績いだりすることに就いても左様である。今年の收穫を賣つて、其金で親を東京へでも連れて行つて喜ばしてやらうなどと思ふのは、道徳が標準になつて居る。若し、この收穫を金にしたらば親などは老耄て棺に片足を入れて居るから、どうでも宜い、可哀い彼の妾に、今年は冬衣を一切造らへてやり、彼妾の喜びくさる彼の顔を見てやらう等と思ふのであつたのならば、些細なることではあるが、親には不孝の子となり、國家には不忠の臣となるのである。そんなものばかりが寄集つた國家だつたら、其の國家は、前途甚だ危殆たるを免れ得ないのである。

この績ぎ上げたる糸を織つて、老母さんに絆纏を縫つてあげよう等と思ふのだつたら已に其の村娘の仕事は、道徳が標準になつて居る。若し、この糸で、あの情夫の袷でも織つて上げたら、一層可哀がつてくれるだらうと思ふのであつたのならば、不孝となり、不逞となる。恚ういふ婦人が生んだ子に依つて作られる國家であつたら、其の國家前途は甚だ危殆たるを免れ得ないのである。

重大なる宗教家の責任

さて現代の道徳は如何。世態人情が極めて輕薄となつて、偶々一人あつて、道徳を堅守して居ると、融通の利かぬ木彊漢だなど、罵倒して、共に齡するを耻づといったやうな風にすらなつて居る。恚ういふ間に立つて、此の頽廢したる道徳を呼び興すには、我佛敎家の鼓吹を待たなければならぬ。佛敎家の責任も重且つ大ではないか。

道徳を修むる人は、現代に於ては衆人の目標となる名譽を荷ふのみならず、其餘光は、長く千歳の下までも輝いて、子孫長久の幸福を得るものである。それで、前にもいつた通り、道徳は『信』によつて産出し、『信』によつて養育せらるゝものであるから

道徳は苟も此の信を離れては、一瞬間といへども生存して居るわけには行かないのである。華嚴經にも、信は道の元にして、功德の母なりと説かれてある。

金甌無缺の國

萬世不易の國

日本帝國は金甌無缺な國體を有つてゐる。即ち、聖天子は一系連綿の天子におはしまして、今日まで御一代でも缺けた例を見ることがない。そして、御歴代、ともに蒼生を愛撫せられたまふこと一方ならず、丁度父母が其の子を愛するやうの御心持を以て治められた。蒼生にも亦曾て非意を企てた者の有つた例を聞いたことがない。尤も其中には平清盛、北條泰時といひ、足利尊氏といふやうな不忠の臣の無いでもなかつたが、しかしながら、これとても、たゞ一時他の方面へ御遷幸を煩はしただけで、己が、取つて以て九五の位に昇らうなどといふやうな暴逆な考を起した者は曾て無かつた。外國などを見るに、先きの天子が亡ぼされて、後の天子が帝位にのぼるといふやうな

ことはざらにある。殊に、支那などになると、隋の煬帝の如きは、其の帝位にあることは極めて僅かであつた。即ち三日太平であつた。今日の天子は昨日の臣下であり、又今日の天子は、明日又臣下となる。實に慌ただしい有様ではないか。日本のやうに、萬世不易君臣の有つたことを聞かぬ。また有り得べからざる筈である。

不忠の儒

恚うしたありがたい國に生れて、又ありがたい天子の御治下に生息しながら、其の以前には、天子の御事をとやかく申上ぐるのみか、非常なる亂暴な言を弄して、更に顧慮するところの無い者があつた。彼の徳川家の儒者林羅山は、恐れ多くも、稱徳天皇さまを評して、秦の太后、即ち以前は呂不韋と情を通じたやうな女に比し奉つた。何とした暴漫極まる沙汰を申上げたものか。たとひ假りに、實際そんなことが御有り申したとしても、これを文章に綴つて、天下に其の醜を表白する等とは何事であるか。況んや、稱徳

天皇様にはさういふ御方にはおはしませなかつたやうに充分に拜察申上げることが出来るに於ておやである。

稱徳天皇様は、佛法を信ぜさせたまふことが篤かつた。天平寶字壬寅六年には、鑿真和尚を戒師として出家入道し給ひ、法諱を法基と尊稱し奉り、又東太寺の大佛殿の四天王の銅像を鑄させたまひたること等も御有りなされた位であつた。佛敎を信ぜさせたまふ方に、今日歴史上に見えて居るやうなそのままの御行ひのあらせられたとは迎も信ずることは出来ないのである。殊に歴史といふものは、事實を捏造したり、また少しばかりなことを、文章を綴るに就いて飾らんとしたりする爲めに、知らず／＼事實を大きくして了ふ例がいくらも有るではないか。

とまれ、かくまれ、日本の國土に生れて、日本の聖天子にはぐくまれて居ながら、其の聖天子の御先祖の御非行を御指摘申上ぐるやうなことは、以ての外の不忠といはねばならぬ。羅山子はたしかに漢學に毒せられた一儒であつた。

君臣倫と父子倫

日本帝國は、之を約めていへば聖天子の一家である。そして聖天子は父母にてましますから、五千萬の同胞は父母の膝下を離れない赤子である。されば、歴代の聖天子、ことごとく國民を愛撫したまひ、饑饉年に、自ら食を減ぜさせられて民の餓苦を思はせられたり、寒夜に御衣を脱がせられて、砭肌の寒さを忍ばせられたりした御例を幾干も拜聴してゐる。かやうに真正の父母の情を以て臨ませられてゐらるるから、民も亦真正の赤子の情を以て御慕ひ申上げて居る。故に、我が日本帝國に於ては、決して君臣倫と父子倫とに厚薄輕重が付いて居ないのである。

之を、日本に最も關係の深い支那に比較して見よう。支那に於いては、君臣倫と父子倫とに、載然たる區劃を立て、居つた。これといふのは、國體風俗の性質が然らしむるとはいへ、日本のやうに萬世一系の聖天子を戴き、人民は一致して君に盡忠の情を捧げ居るといふやうな状態に立ちいたらないが爲である。

日本に於いては、其の父子倫を擴見したものが君臣倫となつて居る。父は子の惡を隠し、子は父の惡を隠す。これが眞の道德である。されば日本人民にして、萬世不易にわたらせらるゝ聖天子即ち我々の父母にてまします方をわけつらふことをするのは、日本國體の上から論じて、日本倫理の上から論じて、不孝の子、不忠の臣たることは免れ得ないのである。世態人情、ますく降下して、たゞ物質のみに走りつゝある今日となつては、殊にこの點に於て最重の注意を拂はなければならぬのである。

天照太神の大麻

維新前には、眞宗の信徒は、自分の教儀の上から見て、伊勢太廟を拜することをしなかつたが、維新以後となつてからは、天照太神の大麻を拜請して、各戸に祭るやうにした。これは國體の如何に氣がついた遣方で、まことに喜ばしく、まことに目出度いことである。

ある。抑も、日本人民たる所の性質から見ても、吾々がともに各家の祖先を各戸に祭るは、何故であるか、これは吾々の一家を開いて呉れた祖先は、吾々に重大なる恩恵を有つて居るからである。この理を擴めて往つたならば、日本人民たるものは、必ず天照太神の大麻を各家に祭らざるを得ない當然の理があるのである。

且は又、この日本國に、この佛教を弘くひろめるやうにしたのは誰の力であるか。之をしらべて見るに、もとより各宗各派の祖師が黽勉された效も没することが出来ないものであるけれど、若し、上、聖天子が、この佛教を弘めることを御許容なされなかつたらば、どうであつたか。又歴代の聖天子が、お自らこの佛教を御信仰なさらなかつたらば、どうであつたか。又、聖天子は、この佛教をおしひろめるに御力をお注ぎならうと御意なされても天照太神が、これを忌みさらはせられたのであつたならばどうであつたか。日本の状態は、實に悲惨なものになつて居たかも知れぬ。日本魂は、日本固有の精神ではあるが佛教が絶えずこれと終始して、基礎を鞏固にし、光輝を添へたが爲に、今日

宇内に高く誇ることが出来たのである。

されば、吾が佛教の盛大になつて、實質的に國教となつたのは、天照太神の御神聖と御歴代の聖天子の御信仰とによつたことは争はれぬ事實である。憊う定まれば、日本人民たるものは、佛教を深く信じ、陛下には忠を盡し、父母には孝を致し、なほ各戸には天照太神の大麻を拜請して之を祭り、日々に尊敬の念を捧げなければならぬではないか。

佛教と耶教

國家の法律と眞正なる宗教

世界を治める道に二つある。一つは國家の法律であつて、一つは宗教である。其の國家の法律は、吾々の有形的肉體以下百般を秩序よく治めるし、其の宗教は、吾々の心以上上の數限りもない念慮を治める。されば、吾々は、外には國家の法律を遵守し、内には眞正な宗教を信仰しなければならぬ。此の内と外とに留意して、正直に世の中を渡つたならば、身も安樂になり、ついでには、國家も安泰になるのである。

殊に我が佛教は、歴代の天皇が御信仰あそばされ、實際的の國教ともいたされたのであるから、吾々も深く信仰して、ます／＼國家を安泰にするやう心がけねばならぬ。かりに、今天子様が、この法律を御制定なさらず、有形的肉體以下を御支配くださら

なかつたと假定したら、其の結果はどうなるか。強い者に弱い者はいぢめられ、女子は男子に思ふがまゝに擲られ、向うには人殺があれば、こちらには盜賊が横行する。一時として、安き心をして居られないのである。

又佛教が、吾々の心以上を教誡しなかつたと假定したら、其の結果はどうなるか。愚暗にして迷ひ易い人間だから、いつも、身の罪や、口の罪を犯しづめて、折角、文明開化の聖世に値ひながら、始終法律上の犯罪人となつて、禽獸と少しも變りの無いものとなつて了ふのは必定である。恚ういふ譯柄であるから、法律と宗教との功德は、之を大きくいへば、日本國を安泰の地位におき、之を小さくいへば、吾々一身を、安穩に、愉快にそして人道より脱れさせないやうにしてゐるのである。

しかるに耶蘇教に泥酔した一味の者は、日本の此の文明は、西洋から受けた賜である。西洋は、耶蘇教を信仰して斯の如き文明を來したのだから、文明國となる以上、宗教としては耶蘇を信仰しなければならぬ筈だ。文明的國民の精神修養は、一に耶蘇教に

依らなければならぬ筈だ。佛教は文明國より渡來した宗教でないから、文明にならなかつた維新前まで流行したのば兎も角、今後は、どこまでも耶蘇教で行かなければならぬといつて居る。

佛教の價値の、そんな淺薄でないこと、日本國民の國民的思想は佛教に胚胎されて來たこと、日本魂は佛教より生じたこと、なほ今後幾千年までも、幾萬年までも、日本國民は佛教と終始して行かなければならぬこと。佛教は國教となつて居ること等を知らないのである。其等の研究的訓話、別に述べてあるから、其の方で篤と心得てもらひたい。

耶蘇教徒の盲言

それで、私は、私の目に映じた耶蘇教を少しく論評して見たいと思ふ。

耶蘇教は、何故に、西洋に力を得て勃興したか、思ふに、西洋には、佛教のやうな意

味深長にして、微妙極りなき佛教が弘通して居なかつたが爲めであらう。これが其の一つ、次に、耶蘇教は其の宣教師が、貧民と見ると、無暗に金銀米粟等を施したり、病人と見ると、殊更に施療したり、様々な工夫をこらして、信仰者を籠絡した爲である。

これが又其の一つ。次に、耶蘇教徒が兵力を以て國を侵したが爲である。これが又其の一つ。何れの原因を見ても平凡である。決して學理の上に根據を有つて居て、學者が之を研鑽したといふやうな宗教ではない。西洋に於てすら、色々の學問の上に矛盾を來すとあつて、已に排斥されようとしたことが有つたことは、明らかに彼土の歴史が語つて居る。

そんな淺薄な基礎の上に立つて居ながら、文明國の宗教だといつて、勝手な熱を吹いて居るのには呆れ返つて了ふ。

それで、耶蘇教徒は、耶蘇教を信仰しない國、耶蘇教を信仰しない人民は、如何に文明國文明人民であつても、口を極めて、之を野蠻國だの、野蠻民など、罵詈雑言して居る。

我が日本は文明國である。歐米の學者も、已に是認して、其精神修養の點に於ては、國民の精神修養の基礎を研究したり、又しようとしつゝあるにも拘らず、耶蘇教徒は、耶蘇教を信仰しないところから、まだ野蠻國の域を脱しないなど、少し前までは罵詈雑言して来たものであつた。吾等を以て言はしむれば、耶蘇教こそ、文明國の人民が信仰すべき宗教ではないといひたい位なのである。これ佛敎の眞髓をば研究せざるが爲とはいひながら、事理の顛倒も亦甚しいといはなければならぬ。近代になつては、彼等も日本魂の、どうして出来たものであるといふことや、佛敎が其の基礎を皇室に植ゑて、千有餘年來、國家と其の盛衰を俱にして来た所以やなどに氣が付いて、うっかりしたこともしなくなつて、大分に覺醒して来て、以前のやうな罵詈雑言を吐くことはしないやうになつて来たやうだが、それでも、教義は依然として變更して居ない。

私の耶蘇教觀

宗教は國家の生命であるとともに、國家は宗教を離れてはならぬ。日本の宗教は、佛敎である。佛敎は國敎である。今日の國民精神を造つて来たものは、まがふ方なく佛敎の力である。されば、國家を度外視するやうな教義の上に立つて居る宗教は、いかに憲法に於て宗教を信することの自由は許されて居るとはいへ、其の宗教については、よく考慮を費さなければならぬこと、思ふ、國家あることを忘却せしむるやうな宗教は之を要するに、信者をして、其の國家を破壊せしむることになる。何となれば、宗教の力は偉大であつて、これが爲に起る争は、遂に國家の争となり、國が亡びたり、榮えたりした例は、西洋の歴史をしらべて見ると澤山に出て来るからだ。其の國家に住する國民は、其の國家特有の宗教、即ち國家と歴史をともにして来た宗教を信仰しなければならぬ。其の國家と歴史をともにして来た宗教の信仰不信仰は、やがて必ず國家を安泰或は危殆の地位に導いて行く。日本人民は飽まで佛敎を信仰して、大にしては、國家を富強にし、安泰にし、小にしては、一身の精神修養を進め、渾然として玉の如き人となら

なければならぬのである。

god = sp.

耶蘇教は、我日本の國體に反いて居る。其の根本義は、日本の國體を忘却せしめようとして居る。日本魂を破壊させようと思掛けてゐる。日本人民は餘程の注意を拂はないと、上、聖天子の擁護を受け、何一つ不足なき瑞穂に世を送ることの出来る光榮を荷うて居ながら、本末終始を誤つて、之を比へば、自分の親を振捨て、他人の親に孝行するといふやうな變妙な現象を來すやうになつて了ふ。皮相的の見解かは知らないが、私は、耶蘇教の根本義に向つて、甚だ疑ひを懐くものである。耶蘇教は、其の祭る所、獨一眞神のゴッドより外には何者もないのである。このゴッド一神より尊いものはないとして居るから、妙な見解を下して居る。

ゴッドは吾人の眞の神様である、眞の父母である、眞の主君である。天照大神は邪神であるから、尊敬するの必要を認めぬ、延いて日本の大小の神祇は、皆邪神である、之を破壊するのは、ゴッドの神様の神意に叶つて居る。と、こんなことを其以前には言ひふらしたものだ。

この結果、伊勢大廟に不敬を致したるものが出來た。陛下の御影を禮拜しない無禮漢も出來た。なほ、祖神を以つて、三韓から渡來した一個の漂民だの、伊勢大廟は、往古野蠻民がゴッドを祭つた時の祭壇の跡だの、三種の神器は、古代ゴッドを祭つた時の祭典器具だのと、あらゆる不敬極まることをいふやうな者すらも出來て來た。

この宗教が、自分の國の西洋に在つて、この言をいうたにしても、之を聞いたけ國民は、切齒扼腕すべきである、況んや、親しく日本に來て、しかも之を信仰した日本人民がこのことをいふに當つては、言語同斷とも、無禮暴逆とも、何とも言ひやうのない淺ましいことではないか。

誤つて邪道に入れば、遂に日本國有の精神を滅却して了ひ、我國體を根本から傷ひ、現神にまします上御一人を御侮辱申上げることになる。國民たるものは、宜しく慎重の態度を取つて、其の歸趨を明かにして、どこまでも佛教に依つて、國家を安泰に、自己

を修養しなければならぬのである。

新約全書、馬太傳の第十章に、

『地に泰平を出さん爲に我來れりと意ふなかれ。泰平を出さんとに非ず。刃を出さん爲に來れり。夫わが來るは、人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、嫁を其姑に背かせんが爲なり。』

とある。國家を騒がせ、人道を亂させる宗教といつても差支なからうと思ふ。佛教は、我日本國の、まだ未開であつた時に、已に人民に大義名分の所在を知らしめ、文學や醫術を勃興させ、人智の開發に多大の貢獻をしたのはいふまでもなく、死屍山野に滿ち、父子流離するといふやうな悲惨な亂戰中に於ても、よく文教を維持し、君には忠、親には孝の精神を曾て銷沈せしめたことがなかつたのを見れば、如何に佛教が、我國家と其の終始をともにし、國民精神を底の底までも吹込んで居ることがわかる。

それで、日本人民の信仰すべき宗教、また歴史上より見て信仰しなければならぬ宗教

は、佛教を置いては、他に何者をも見出すことは出来ないのである。日本國民たるものは、外は法律を遵守し、内は佛教を信仰して、この金甌無缺の寶國を、幾萬々年の後にまでも、ます／＼其の光輝を赫奕せしむることに力めなければならぬのである。

横暴の手

強制的還俗

孝明天皇様が、頻りに王政復古にお力を注ぎあそばされたこと、そして之を協賛し、補翼し申上げたのは薩長の偉人連中であつたことは誰も知るところである。しかるに彼の薩長土の人達は、武斷で無ければ、大業完成の目的を遂ぐることはむづかしい、従つて優柔な佛教の流行は、我國固有の神教を淆り、國體を危殆に陥らしむるものである等と唱へ、この佛教を廢滅させ、國家百年の計を永へに誤らさうとしたのであつた。自分達が佛教信者で無いからとて、我國の上は御一人より下は庶民に至るまで昔時より信仰して、殆んど國教のやうにして來た佛教を、一朝にして弊履の如く捨て、了ふとするのはそも／＼何といふ暴戾な仕打ちであるのか。

孝明天皇様は、歴代の御心をつがせ給ひ、非常なる佛教御信仰で居らせられた。けれども偉功のある薩長土の者に御遠慮なさらなければならぬのか、表面では佛教を御信仰なさらないやうな御様子をお見せなされた。否、佛教に御壓迫をお加へ遊ばさるゝやうな御行爲までもお取り遊ばされた。御苦衷の程、察し奉るさへ畏れ多いことである。従來、各大寺の坐主は、親王様達が御成りあそばされたのであつた。孝明天皇様は、この法親王様方に、復飾即ち還俗なさるゝやうにお勧めなされた。それで文久三年には、粟田口青蓮院の宮に復飾をお勧めなされた。宮は中川の宮とならせられ、後に久邇宮朝彦親王とならせられた。それから慶應三年となつては、勅命を以て、すべての法親王に復飾を迫られた。孝明天皇様の、この時分のなされた方は、少しくお手厳しい御模様のやうでもあつたが、つらく／＼之を恐察し奉れば、天皇の御左右には、國家の前途につきて御協議にあづかるやうな相應しい御相談相手がなかつたから、せめて法親王の方々が還俗して宮中にお歸りあそばされたなら、又膝とも談合の善い御相談の出で來ないと

も限らぬ、とても思召されたのではなかつたか。

この御勅命が下つたので、御皇族方に於かせられては、御悲惨なる御事態が出態した。お一つは聖護院の宮様、お一つは村雲尼公の御事である。聖護院の宮様は、最初勅命のあつた時にも復飾なさらず、二度目の勅命のあつた時にも復飾をさらなかつたが、二度来るものならば、必ず三度来る。三度まで勅命を煩はしては何とも畏れ入ることだと思召し、三度目の勅命の参らぬ先に御自害あそばし御果てなされた。

村雲尼公にも復飾の勅命があつた、尼公に於かせられては、佛を御信仰あそばすこと一方ならず、竹の園生にあればこそ復飾の勅命もあれど、尊き御身分を、吾から落ちて平民の籍に入り、皇族の御待遇を御受あそばさないことも甘んぜられ、御復飾もなさらず、益々佛の道を踏み分けられたのである。

薩長土の暴戻

さて、孝明天皇様は御崩れあそばして、明治天皇の大御代とはなつた。維新草創の際でもあり、且つは殊に薩長土の三藩に御遠慮なさらなければならぬことは、先代お父君の御代よりも、更に一入甚だしくなさられければならぬ御事情もあつたので、佛敎を御信仰あそばして居らせられながら、矢張表面には、之を廢滅せしめられんとする御方針を御取りなされなければならなかつた。こゝに於て、神佛混淆といふことを禁じなさらなければ餘義なき御場合に立到らせられた。

そも、我國は、遠く聖徳太子様が、十七箇條の憲法の中に佛法僧の三寶を説いて、延いて神をも崇敬しなければならぬことを懇切に掟せられたので、由來神と佛とは非常に宜く和融せらるゝやうになつても来た。聖武天皇様が、大佛を建立あそばされた時に、伊勢の神宮に奉幣使を立て、御神意のほどを伺はせられたことなどもあつて、もう此時代には、神と佛とは混淆して差支の無いことに誰も異説を挟む者は無かつた。これが馴致して、奈良朝の頃になつて、盛に本地垂迹説が行はるゝやうになつた。そ

してこの本地垂跡説には、神が本地にして佛が垂跡、佛が本地にして神が垂跡といふ二説があつた。佛は神を助けるといふ説も出て来て、何れの大社にも、必ず本地堂なるものが建立さるゝに至つたのである。本地堂には別當職を置いた。別當職は僧侶を以て任じたのである。之を例せば、奈良春日神社の本地堂南圓堂の別當職は興福寺で、あつたし、手向山の本地堂の別當職は、東大寺であつた。故に大社有れば、必ず神官と僧侶とが居つて、互に相依り相翼けるので、神佛はますます和融して來るのであつた。

さて明治御大代様となつて、一朝忽然として、この古い歴史のある神佛混淆を禁ぜさせ給はなければならぬやうに餘儀なくおさせしたのは、そも／＼誰の辣腕であつたか、一得あれば、一失あり、薩長士は、半面には維新に與つて偉勳があつたけれど、半面には、己佛教を信仰しないからとて、自己本位に依つて之を破壊しようとした大缺點があつた。

壁畫と十三重の塔

神佛混淆の勅禁があつた當時から、其の後しばらくの間、佛教に對する壓迫といふものは、殆んど筆紙に盡すことは出來ないのである。

殊に、大社中に在る院は、或は移され、或は毀たれ、或は毀たれやうとした。私如きは、當時の大厄に逢つて、親しく難苦を嘗めて來たから、今から之を振顧ると、身の毛も竦立つばかりの思に閉ざされるのである。

大和國の三輪明神の若宮の本地堂は大御輪寺と云つた。其の御堂の須彌壇の裏面の壁畫は弘法大師の御筆であつて、世界に二つとはない、重寶なもの、それから其の寺内に十三重塔がある。此二つは、ともに天平時代の遺物であつて、美術史等に甚大なる研究的材料を供給するものであるから、無論今日から見れば、國寶とせらるべきものである。之を其の時、本地堂を焼拂ふことさへ已に暴戻極まることであるのに、塔は壞し、壁畫

は祝融に委ねて、何等顧みるやうな態度すらしなかつたのである。

現今塔の峰の談山神社にある十三重の塔は、藤原鎌足公の御子、隆意和尚が支那より持ち還られたものであるが、之れも亦、暴戻なる廢佛家の手に依つて破壊されようとした。隆意和尚は佛學を修めに入唐したが、在唐中に、父鎌足公の薨去を聞き、悲痛の情に勝へがたく、せめて父の菩提の爲にとて、彼の小さい十三重の塔を作り、それを支那から持つて歸り、塔の峰に建てられてから、千年の久しき間、何の變りもなく其のまゝに存在して来たものを、當時、談山神社をこゝに祭つて、其の塔をば壊さうとしたのである。この時分、大阪の投機者にして某といふもの、甚だ之を惜み、之を買取らうとした。政府の方ではこの談山神社から取り去つて了へば宜いのであるから、之を誰が買取つて行かうが、一向に痛痒を覺えないが、其の地方の人が入釜しく言ひ出した。千年來の遺物、殊に談山神社の靈體鎌足公の御子の隆意和尚が在唐中の御作ともなるものを金で買ひ取らせては鎌足公の御靈のほども畏れ多いと、衆議なか〜一決しなかつたが、

さればとて、このまゝにしておけば、わけもなく取壊されて了ふ。取壊されて了ふよりか、一時買取らせても、後日期を見て取り戻せば、却つてこの危難を救ふことになるではないかといふことになり、其の某なるものに委せて引まつた。恁ういふやうなことで、危難は逃れて今日ではもとの通り塔の峰に存在して居る。

行基菩薩の阿彌陀佛

又私の郷里越後にも恁麼ことがあつた。彌彦神社の本地堂は眞言宗であるが、そこには行基菩薩の御刻みなされた阿彌陀佛が安置されてあつた。こゝにも神佛混淆すべからずといふ暴戻の手が伸びて来て、容赦なく本地堂を壊して了つて、彼が行基菩薩の御刻みになつた阿彌陀佛をも打壊さうとした。越後は殊に熱心なる佛教宗信者の多いところなので、これが爲に、百姓一揆が起りさうにもなつた。それで、其の筋の者共は、彌彦では打壊すことも出来なくなつて、勿體なや、其の御佛を繩にて縛り、寺泊の濱まで

引ずつて来た。此濱で打壊して海中に投じようと工んだのであつた、さア、恚うなると百姓はなほさら黙つては居ない、一揆を作つて寺泊まで追つて行く。如何なる暴戾の手も、これほどまでに熱心に信仰して居るものを打壊しては自分達が危害を加へらるゝやも知れぬと怖たか、そのまゝ其の濱に打捨つて行つて了つた。信徒は涙を拭きゝ其の御佛を假の小屋に安置し申上げた。現今では、彌彦の寶光院の境内に阿彌陀堂が出来てそこに其の御佛を安置し申上げてゐる。

滑稽牽強附會

それかと思へば、たい神佛を混淆せしめないやう、佛は廢して了ふやうにとの手段を取るのであまり、滑稽に堪へぬほどの牽強附會を行つたこともあつた。

聖天の靈像は男女二體が並んで居らせらるゝ、そこで其の筋では男女二體あるところから日頃から目差して居た野州の目間聖天に向つて、其の靈像は、諾刪二尊の御尊像で

あるといふやうな牽強附會を言ひ立てゝ、無理槍に神社にして了はうとした。然るに當時の住職は稻村惠隆といふ人で、徳も優れ才智も有つた、遣手だつたから經文などで立證し、滔々と辯じ立てたので、さすが御役人も、抗辯することが出来ず、そのまゝになつたとやら。

それから又、同じ野州の、或る大寺の住職を呼んで、靈體の不動明王であるのを、それは不動明王ではない、不動明神であらうと、遮二無二神社にして了つたといふこともある。

すべて恚ういふやう調子で、理が非でも、本地堂を焼拂ひ、靈像をも打壊したり、焼拂つたりしたが、此の場合、いつでも神官が立合つて居た、神官の極めて得意な時代で政府と相俟つて、それはゝ残酷な取扱をして、更に後の憂を顧慮するところがなかつた。こんな木像に、何の靈がある。彼若し靈有らば、之を罰すべしと云つて、靈體に土足をかける位は愚かなこと、小便などを爲注けて、人民から其の信仰の念を奪去らう

としたのである。まことに淺猿しき限であつた。

寺領の沒收

明治四年になつて、政府は各寺の寺領といふものを沒收して了つた、寺領があつてこそ、幾百の僧侶を養成して行くことも出来て、其等をして益々佛の道に勉勵させることも出来るのである。衣食足りて禮節を知るといふ語もある通り、被ふに衣なく、食ふに食なければ、いかに妙法を身に體したく思つても、事實の上から見ても、到底素志を遂げ得らるべきものではない。昔の聖僧の如にまさか樹下石上にはかり行ひすまして居るわけにも行かなければ、且つは雑多なる高壓手段にも禁へかね、身の振付け方等を心配して選俗して了つたものが多かつた。されば、吾々高齡の者は、その以前に曲りなりに、も學問が出来たが、維新當時には、たとへ還俗しないまでも、満足に勉強も出来なかつたから、吾々と今の壯年の人との中間、即ち五十歳前後の人に、優れた佛學者といふものが無い、今の高齡の人が口になつた後、しばらくの間は、其の教導の任にあたる人が無いだらうと心ある者は心配して居る。

墮落の淵に導く

宮中の清涼殿に、御歴代いづれも佛像を安置して御信仰遊ばされた。それが、前陳のやうな時世時節になつて來たから、其の佛像は、宮中の御菩提所になつて居る東山の泉湧寺に御下げになつて了ひ、ついでには、各寺の門跡號を廢し、なほ勅會の御修法すらこれを御廢しになつて了つた。

殊に滑稽なのは、住職の進退を縣廳に一任して了つたことである。

明治五年になると、更に僧位僧官を廢し、同時に色衣を着することを廢せられた。なほ高野山、比叡山の女人結界を解き、同時に肉食妻帶の禁をも解かれた。

女人結界や肉食妻帶やは、秀拔なる聖僧を生み出す所以である。この禁を解いて自由

にしろ、勝手にしろと云つたやうな處置をするやうでは、行ひすました堅固な聖僧ならば知らぬこと、これから修業を積んで行かうといふ若僧どもに取つては堪つたものではない。牽かれ易い外界の慾に染み込んで、知らず識らずに墮落して丁ふ。政府では、この墮落して行くのを、佛教を滅さんとする恰好の口實にすべく待つて居たのかも知れぬ。其の後、僧徒の滔々として墮落の潮流に溺れ、識者の目を擧せしむるに至つたのは、其の源はたしかに此處に胚胎して居るのであつた。

昔時、欽明天皇の御代に、百濟王が、善光寺如來と經文とを我朝に獻じたところ、中臣氏、守屋氏等が異論を唱へ、其の善光寺如來を踏躡にかけたが、ブラチナなので鎔けないうそこで難波の堀江に投込んだといふことは誰も承知して居ることであるが、かやうにも佛教に對して危害を加へようとしたことは、世人は前代未聞のやうに心得て居るけれども、彼の明治維新の當時の佛教に對して、より以上の壓迫、凌辱、危害を交々加へた暴戾は知らぬものが多いやうである。といふのは、明治史上にも具體的に載つて居らぬ

所以であらうが。

説教の關涉

此の時代には、僧侶にも神官にも、教部省から、或る官位とでも云つたやうな役職を任じて、それへの待遇を設けた。

教導職試補から、權訓導、訓導、權小講義、小講義、權中講義、中義義、權大講義、大講義までを判任とし、權小教正、小教正、權中教正、中教正までを奏任とし、權大教正大教正を勅任とした。僧侶神官とも、其の役目の名前は同じであつた。そして教部省が勝手に之を黜陟進退した。役目の名前は、さやうに僧侶も神官も同じであるけれども政府の意嚮は廢佛主義であるから僧侶にまでも、神官の説教のやうに神教本義の説を説かしめようとする。即ち、教部省では、三ヶ條を發布して、其の三ヶ條の範圍を出るやうな説教は絶対に禁止したのである。三ヶ條とは、

第一、敬神愛國の旨を體す可き事。

第二、天理人道を明かにす可き事。

第三、皇上を奉戴し、朝旨を遵守すべき事。

この旨趣は、何も悪いことはない。まことに結構である。今日吾々が法を説くに方りても宜しくこの旨趣は體す可きである。けれども、當時のは、今日、吾々がこの三ヶ條を解釋する旨趣とは大に旨趣を異にして居た。絶對的に神を尊崇し、佛教の旨趣は、どちらかといへば、説かしのめないやうにするといやうな風、即ちどこまでも佛教を滅して了ひたいといふ底意があつたやうに見受けられたのであつた。

この時分、敎院を、大敎院、中敎院、小敎院の三階級に分け、佛教にも強制的に神敎に倣はせたから、須彌壇には、真中に天御中主神、其の右と左とに、高御産巢日神産巢日神を、そして天御中主神の前に天照大神を据ゑて、葦酒山門に入るを許さずと標榜した僧侶の身に、鯛などといふ魚類を、恭しく其の御前に供へしめた。慙ういふ時代であつたから、時としては、僧侶をして神葬祭を行はしめたことすら有つた。

佛教不可亡の一大原因

あつたから、時としては、僧侶をして神葬祭を行はしめたことすら有つた。

されば、政府當局者の眼中には、僧侶と云ふものは有つて無きがやうな有様であつた。例へば、民政局から僧侶を呼び出すことがある。羽織袴で出頭すれば、上へあげて、神官同様の待遇もしたが、若し袈裟衣でも出頭しようものなら、異邦の邪教を奉ずることとを表明して居ては甚だ汚ららしい。左様な風采では上へ通すことは罷成らぬと云つて、殊更に庭に蓆なんかを布いて、其の上に坐らせたものであつた。

かくの如く、虐待を受けて居たけれども、敎の光は遂に失せず、當今の如に隆盛を極むるやうになつたのは、一般の人が、もとより之を信仰する力の失せなかつたのも原因となつては居るが、歴代の天皇様が深く御信仰を遊ばされ、これによつて民庶を感化あそばされたことが、一大原因となつて居るのは争はれない事實である。

最後に私は、彼の神佛混淆すべからざる主義のもとに、各寺院の御靈體などを開いたことのあつた時、淺草の觀音も其の禍を蒙りかけやうとした珍談を述べて、本章を結ぶことにする。

淺草觀音の靈體

誰も知る如く淺草觀音は、千有餘年來の靈境である、其の御靈體の一寸八分であることも誰も知つて居る。しかし未だ眞にこの御靈體を拜して、慙うした御靈體であると、人にも知らせ、世間へも發表したことはない。それ故に、口さがなき童は、千有餘年來、其の御靈體の變らせたまふこと無く御存在なさる筈はない。或は、もう、御靈體はお亡くなりあそばされて、悪くすると、石ころでも入れてあるやうなことは有りはすまいか等と噂し合つて居る。

時恰も、政府では、佛教を滅ぼさうと鵜の目鷹の目の折、一番取調べて、實際其の御靈體があれば兎に角、若しも空であつたとか、他に又いかゞはしい物でも入れてあつたとかしたら、忽ち之を滅ぼして了はにやならぬといふ下心で、或る日、來る何日には、御靈體を取調べに行くから、其の用心をして居れといふ達旨を傳法院へ致した。

當時は御院代が居らせられた時であつた。御院代は驚かせられ、誰も開いたことのない御靈體、横暴な手に依つて開かるゝのは何とも畏れ多いことである。けれども、實際其の場合に御靈體がお有りあそばしたならば善けれど、千有餘年を経過し、かつてお聞き申したといふことを聞いて居らぬ御靈體、取調べられた結果は、どういふことになるかも知れぬ。當山の安危は此一舉にかゝるやうなことになるはすまいか。之を思へば、其の筋の人が取調べに來る迄、其のまゝにしておいては却つて靈罰のほども恐ろしいと、他の二三人の役僧と談ぜられ、一山の者にも極めて祕密にして、先づ御靈體を御開き申さうといふことになつた。其の時、御院代の相談に與つた役僧の一人が、今の住職修多羅亮延師である。私は、この修多羅師から直接に祕密に聞いたのが、恐らく一山の中

でも知らぬ者の有るといふ此の秘密の話を公開するのは、ちと無責任のやうではあるけれど、これが爲めに決して淺草寺の尊嚴を批ぐといふことはなく、一面當局の壓迫の手の凄じかつたことを證據立てるのに恰好の材料ともなるからして、敢てこゝに公開することにしたのである。

正面に拜ませられたまふのは、あれは慈覺大師の御像である。裏へ廻ると錠が下してあるが、その錠を開けば、其處に觀音の靈體は祕藏されてあるのである。これは火事の時にも直に御避難申上げ得らるゝやうに都合よくしてあるのだといふことだ。

さて錠を開けば、果してお厨子が安置してあつた。そのお厨子を、そつと傳法院の方へお移し申上げて、恐るゝお開け申上ぐることにした。お厨子は三重になつて居る。一重、二重と開けて、最後のお厨子になると、流石に開けかねたが、さてあるべきにあらざれば、押切つて念佛を申上げた、綿のやうなもので幾重かに巻いてある。なほ恐る恐る其の綿を取ると、中から現はれあそばしたのは、黄金佛では無くて、一寸八分より

か、なほ少し長い木佛であつた。しかしながら古色蒼然、いかにも水草などに揉まれさせられた跡が歴然として見えるのである。で、漸く安堵して、復た故の如くにお厨子の中へ御入れ申上げた。

かくて、役人が取調べに来る當日となつた。先づ傳法院の奥へ請じて、御靈體のお入れ申してあるお厨子を役人の前に据ゑ、さて御院代は、役人に向つて、當御厨子は、千有餘年來曾てお開け申上げたことがありません。といふは、あまりに勿體ないといふのみではなく、若し之をお開け申上げれば、忽ち眼が潰れると申し來つた爲であります。今之をお上の御威光を以て御開け申上げらるゝとも、或はお目の潰れさせたまふやうなことの無いと申上げられません。勿體なくて恐れ多ければ、私どもは御遠慮申上げますと次の座敷へ引退つた。役人共はしばしは何の挨拶もしなかつたが、其の厨子には手も觸れず、左様の靈體ならば、取調べる必要を認めぬ。必ず然る可き靈體の入つて居るに違ひないから、と云つて愴惶として立去つた。

日本の國は、終始佛教と盛衰を共にして來て居て、佛教は國教のやうになつて、何人の腦底にも信仰の念は潜んで居る。廢佛を斷行しようとする暴人の腦底にも、矢張先祖傳來的の信仰心が潜んで居るのである。さればこそこの心が閃いて、お厨子を開ければ目が潰れるといふ恐れを呼び起させたのである。何等の壓迫を加へようとも、佛教は我國に深い根柢を有つて居るから、之を滅ぼして了ふわけには行かぬ。今日の隆盛は申すに及ばず、將來ますます其の光輝を放つに至るは、蓋し自然の數といはねばならぬ。

明治天皇と佛教

明治天皇の信仰

西洋哲學、支那哲學、印度哲學と各自其の専門に走つて研究をして居るが、殊に我が印度哲學、即ち佛教教理の研究は隆盛を極めて、西洋哲學を修むる者、支那哲學を修むる者までが、此の方面の高遠深遠なる教理に身を入れ、専門努力して研究するやうな状態になつた。まことに喜ぶべき現象だといはねばならぬ、しかしながら、これは寧ろ當然の理であつて、一時、彼の西洋の物質的文明が駭々乎として侵入し來り、一にも西洋、二にも西洋と、氣候風土の如何をも論ぜず、之に模倣して、精神界の修養迄を怠つたやうな悪い現象のあつたのは、いはゞ叢雲が月光を遮つたに外ならぬのであつた。

由來、誰も我が日本の國體を知ることく、我が日本は佛教と始終密接の關係をもつて、

一喜一憂を俱にして來た國である。これといふのも、上に至聖無比の陛下が居らせられて、いづれも佛教を深く御信仰遊ばされたが爲である。

恚う語つて來ると、中には、先帝明治天皇陛下に置かせられては、一向に佛教を御信仰遊ばされたやうの御話を洩れ承はらぬ。如何であるかと質問するものもあらう。これは尤もな質問である。其の御事蹟が民間に、あまりに發表せられなかつたがために、あらゆる民衆が洩れ承らぬので、よく／＼調査して見れば、先帝明治天皇陛下は、御歴代の天皇より、層一層に御信仰御遊ばしたもので、其の御事實は今日明々白々にする事が出来るのである。

しからは、何故、かくの如き御手厚き御信仰者にて遊ばしながら、汎く民衆が之を拜承することが出来なかつたかといふに、これには趣味饒多なる原因がある。

薩長土に御遠慮

明治天皇陛下の御父君孝明天皇に於かせられても御歴代の天皇には御劣を御取り遊ばさないほどの佛教御信仰者の聖帝にておはしました。その御子にあたらせられ給ふ明治天皇陛下にておはしますもの、佛教を信ぜさせたまはぬやうの理の有らう筈がない。

時恰も尊皇攘夷、王政復古の聲の喧轟ましい時代であつて、徳川將軍を向ふに廻して朝廷方に滿腔の熱血を注いで奮戦努力したのは薩長土の三藩であつた。その薩長土では何事も武斷々々を振舞して、佛教を極めて蔑視してゐた。そして向ふに廻した徳川將軍の方では、矢張り數代連綿として佛教を信仰してゐる。朝廷では從來は兎に角、其の時には勢ひ表向きに佛教の信仰者でおはすることを標榜なさるゝやうな御行ひを遊ばさるゝことは、之を御遠慮なさらなければならなかつた。誠に恐れ多いことであつた。

しかしながら隠れたるより顯るゝはなして、今日我々が、維新當時よりの佛教史的史實を考査して見ると、御手厚き御信仰者にておはしましたる御事蹟が、鏡の如き光をあらはして、我々の面前にあらはれて來るのである。

中山寺観音の『鉦の緒』

明治天皇陛下が御生母中山従一位局の御腹に宿らせたまひたる時、中山従一位局に於かせられては、日頃から攝津の中山寺の観音を御信仰あそばされて居らせられたので、御使を以て中山寺へ『鉦の緒』を所望に參らせられた。之はこの『鉦の緒』を腹帯に召させられて、中山観音の御利益を希ひ、やすくと御平産あらせられたまはんとのお思召である。この御使を立つたは、嘉永五年の九月二十五日のことであつた。

かくて、先帝明治天皇陛下は、御利益を受けさせられ、芽出度、軽々とお生れあそばされた。されは、翌六年の二月、中山従一位局におかせられては、彼の御所望になつた『鉦の緒』を中山寺に御返しあそばさるゝことになつた。その時は、御所望なされた『鉦の緒』の外に、更に別に立派な『鉦の緒』を一つ御造へになり、それを添へられたのである。其の御使に立つたのは、川村知樂齋といふ人であつた。當時宮中にては、彼の中

山寺の観音に對して、いかばかりの隨喜の情を起させられたまひたるかは、今よりこれを推察したてまつると、思ひ半に過ぎるのである。それから、慶應三年正月九日に、先帝明治天皇陛下には御踐祚があつた。そして其の年の九月二十一日には、恐れ多くも彼の中山寺に向ひ、御生母中山従一位局の御安産あそばしたに就いての御感、ならびに先帝の御成人御祈禱に就いての御感との繪旨を賜うたのである。かういふやうな次第でこの當時京都では、先帝明治天皇陛下は「まよさしく中山寺の御申子にておはしますらん」といふ御取沙汰をした。

其の後中山寺の住職高峰長老を、宮中の御菩提所、東山の泉涌寺の住職に補したまひ御手厚き御繪旨までも給はつた。これは先帝明治天皇陛下の御安産と御成人との御祈禱を恙なく申上げたからである。

孝明天皇の御信仰上の事蹟

孝明天皇の御時代には、内憂外患が頻りに起つて、上は御一人より、下は細民の一夫に至るまで、一日として枕を高くして眠ることは出来なかつた。そこで、佛教に御信仰厚くおはします孝明天皇は、紀伊の高野山と、讃岐の善通寺とに、攘夷鎮國の祈禱をすべき旨うの、御内勅を下し賜はつた、さうして天皇には毎朝、三時といふ雞が鳴いて居る時分から御離床あそばされて垢離を御取りなされ、内侍所においてになつて御祈念を遊ばされ又朝の食物を御しあそばされ、それから佛壇のおん前に坐らせられ、十時頃までも餘念なく念じあそばれたといふことである。

その高野山にて御祈禱すべきやう、時の右大臣近衛忠熙公に御内勅のあつたのは安政五年二月十九日のことである。忠熙公は、とりあへず之を京都東山の清水寺の成就院の月照及び信海の兄弟に沙汰された。そこで、信海は、天皇の願文を奉じて早速高野山に登山したのである、其の忠熙公より、月照兄弟への御内書の中に左の如き文言がある。

『我朝は、往古より、國政の補翼に佛法を立て置かれ來り候處、即今の時勢にて

は佛法地に墜つ。佛法地に墜つ時は、王法も自ら衰微と爲るべき歎。寒心限りなし

此等の旨、神明佛陀の冥助に依らずんば、御大事平穩の期、覺束無き事に候』

て、信海は、御内書の趣を一山の碩學に傳達し、聖上の御撫物、ならびに御祈禱料黄金三枚、それから御願文を差出した。其の御願文は、

今上皇帝寶祚萬歲、文武百官忠誠堅固、渡來夷賊改心退去、奉レ安ニ觀念、大樹安レ

意、武運長久、一天泰平、諸民安榮祈禱之事、五大明王護摩祕法、殊可致ニ精誠ニ之

條如レ件。

安政五年二月十七日

左大臣忠熙(花押)

高野山金剛峰寺 碩學中

とあつた實に恐れ多いことではないか。

それから讃岐屏風浦の弘法大師の御誕生の善通寺へ下し賜つた攘夷鎮國の御繪旨は、近年外夷日を追うて跋扈し、深く宸衷を惱ませられ、將に蠻夷拒絶の期限決定せ

られんとするの處、此頃既に英夷の軍艦横濱に來り、請求の旨趣、必ず兵端を開く可きとの情態顯然たり。實に天下の安危是時に在り。庶幾くは佛陀の冥助に依り、以て皇國の勇威を奮起し、國內一和上下志を齊し、早く醜夷を汎海の遠きに攘ひ、永く覬覦の意念を絶たしめ、神州を汚さず、人民を損せず、寶祚延長、武運悠久の御祈一七箇日、丹誠を抽んず可き者なり。天氣に依りて上啓すること件の如し。

三月四日

右小辨俊政

善通寺權別當

誕生院權僧正御房

とある。

かくの如く孝明天皇におかせられては、佛教を御信仰あそばさるゝこと一方ならずおはしましたのであるから、その御子におはしまして、殊には御生母が中山寺に御安座及び

御成人と御祈禱をさせられたといふことがあり、かたゞ先帝明治天皇陛下の佛教御信仰させられなかつたといふ筈はないのである。

明治天皇信仰上の御事蹟

高野山に御助願の御繪旨

しかしながら、たゞ、御信仰させられなかつた筈がないといふやうに裏面から御推察申上げたばかりでは、なほ隔靴搔痒の感を抱く人があるだらう。それ等の人を驚かさん爲めに、先帝明治天皇陛下が、親しく金剛峰寺高野山に御助願の御繪旨を下し賜つたことを語らう。

それは慶應四年二月二十日の事であつた。先帝明治天皇陛下には、實に高野山に向つて、天下昇平、萬民安堵御助願の御繪旨を下し賜はつたのである。其御文に、

高野山は、大師練行の勝地、百王鎮護の靈場也、是を以て、舊臘事變發動し、今春

忽ち戦争を開く。日夜宸憂増々深し。願はくば、佛陀の冥眷に依り、速に逆賊巨魁を滅ぼし、政令維一新に、國內の藩鎮帝畿に朝し、海外の夷狄王化に歸せしむ。天下昇平萬民安堵の御祈り、宸徒一同丹誠を凝らす可きの由。天氣此の如し。仍つて執達する件の如し。

慶應四年二月二十日

權右中辨(花押)

とあるが、右の御文中の、『願はくば佛陀冥眷に依り、速かに逆賊巨魁を滅ぼし、政令維一新に、國內の藩鎮帝畿に朝し、海外の夷狄王化に歸せしめむ』と遊ばされたのを拜讀し奉れば、いかに先帝明治天皇陛下が、佛教を御手厚く御信仰遊ばして居らせられたかは、明白に了解し奉ることが出来るであらうと思ふ。

聖徳太子の像に御衣を賜ふ

なほ、明治天皇が佛教を厚く御信仰あそばされたる證左を上げて見る。これは敢て私

一人の臆説でなく、然る學者達も云つて居ることである。といふのは、先帝明治天皇陛下には、厚く聖徳太子を御崇敬且つ御信仰あそばされたことの事實が今日明瞭になつて來た。

太秦の廣隆寺には、聖徳太子が三十三歳にておはする所の御等身の御尊像が安置してある。

それで、年は明治の三年、月は二月、日は十六日のことである。先帝明治天皇陛下に於かせられては、この聖徳太子三十三歳の御當身の御尊像に對し、御即位の時に御着用になつた青櫛染の御袍、御下襲、御單等を御贈進遊ばされた。この時の勅使は、たしか山科正二位言成卿だと記憶してゐる。同卿の日記にも、

十六日晴

太秦廣隆寺

(前略)過日禁裡より、當今(先帝)御衣を進めさせらる。(以下略)

とある。

明治天皇陛下の聖徳太子を御崇敬且つ御信仰あそばされた御事は、今の學生諸君には寧ろ異聞のやうに拜承さるゝだらうが、なほ、驚くこと勿れ、明治天皇陛下は、聖徳太子の像を宮中に御取寄に相成り、且くまつらせ給ひたることがおはすとさへ洩れ承はつて居るのである。さて、聖徳太子は、誰も知る如く、我朝での、尤も佛教に御貢獻あそばしたおん方にておはする。佛の御化身とまで申したゝへて居る位である。即ち太子の御生命は、一に佛教を興隆ならしめんとの御所存より外になかつた。その隆々たる御事蹟を御感賞あそばされ、御崇敬且つ御信仰あそばされたる明治天皇陛下の佛教を御信仰遊ばされたるはいふまでもないことではないか。

般若心經の勅封

嵯峨の大覺寺には、嵯峨天皇、後光嚴天皇、後花園天皇、後奈良天皇、正親町天皇、

光格天皇の御六代の天皇の御宸筆の般若心經が藏されてある。其の中で、嵯峨天皇と光格天皇との各別々の箱に、その他の御四代の天皇のは、纏めて一つの箱に封じてある。明治天皇におかれらては、佛教に御信仰厚きところから、明治五年七月二十日、文部大丞の町田久成、宮内大丞の世古延世、ならびに京都府大屬木村清質外三名の者に御降命あそばされ、大覺寺に出張せしめて、彼の御六代の御宸筆の般若心經を開かせられたことがある。さうして、前の三箱に、御宸筆の御名一字の花押檀紙を以て勅封された。

高野山に御祈禱御許可

皇室より諸山に向つて、勅意の御祈禱を仰せ付けられることは、古來からの常例の如くになつて居たのを、明治四年九月二日、太政官達を以て之を廢せられた。それで我が眞言宗にては、再度御修法再興の建白を太政官に提出したところ、特に御許可くだされた。これ等は先帝明治天皇陛下が、いかに深く佛教を御信仰あそばされたことかを推察